

みちのく宮古んだりかんだり

第1部

じん

\* 〈とどヶ崎〉の〈とど〉は魚偏に毛と書くが、  
パソコンで出ないため、

やむをえず平仮名で表記した。

\* 「」内は読み。ルビ。

目次

第1部

八幡沖

カトリック幼稚園

カラミ

ノデ山・ノド山

記憶喪失？

ミヤチヨウ

二つの宮古

三つの宮古とその語源

宮古弁の訳詩

宮古弁訳「あがとんぼ」の原詩

ウミネコとカモメ

宮古八景

まぼろしの宮古八景

臼木青嵐

千徳民衆駅

緑に埋もれた千徳城址

千徳城哀話

岩船の山の奥

山奥のソソチヨ

本州最東端訪問証明書

父を送る

常安寺の坂

浄土ヶ浜道で遭難しかけた話

浄土ヶ浜の穴

潮吹穴

ホラ吹き穴

むかしの小山田橋

八幡河原の繰り舟

宮古の正しいお盆

2B弾

八幡通り

◇投稿 八幡沖のへいか最中◇ \*うらら

宮高の歴史

即席ラーメン記念日

宮古版きょうはなんの日？

宮古のウニ

港町ブルース

旧山口川を散歩する

山口川をさかのぼる

山口の慈眼寺

開かずの寄生木記念館

「寄生木」あらすじ

館合の一石さん

経塚の碑の案内板

山口―館合―横山

館間(合)山

宮古公園地

私家版「寄生木のふるさと」

宮古の町は海だった

オランダ島と女郎島

女郎島の名は消えた

映画教室

浄土ヶ浜の、中の浜キャンプ場

崎山の、中の浜キャンプ場

閉伊の語源

念仏峠と山姥

佐羽根のやまんば

亀岳中学校が消える

馬場の機織り滝

義経の草履

おがんぶづ

学校の下のお骨

石割り白樺

むかしの遠足

雄又峠

◇投稿 ポンネット・トラック\* M改め JAN

お念仏さん

いだこさん

トウキビ

大判焼き・小判焼き

コロツケ・串カツ

宮小

一中

宮高時代

ミントン・ハウス

不思議な地名

市内転々

新町

啄木の宮古寄港

啄木の記事から

むかしの鋤ヶ崎

消えた砂浜

磯鷄村小学校

女啄木——西塔幸子

◇投稿 チョウセンアカシジミ\*うらら

日出島

クロコシジロウミツバメ

山田煎餅

いか煎餅

ラサの煙突

鍬ヶ崎の（遺跡）消滅

田老鉦山

うみねこパン

日立浜の青年漁師

漁師ことば

スンナ、モウガナ

角力浜の謎

◇投稿 角力浜——父の夢の場所\*うらら

鍬ヶ崎

干拓地没収事件

「沢内風土記」の著者

宮古でぼくを  
生み育てて  
くれた父母へ  
捧げる



## ■八幡沖

宮古市の八幡沖〔はちまんおき〕というところで、ぼくは生まれたことになっている。

戸籍抄本に、そう記載されている。

〈宮古市宮古第六地割字八幡沖四拾八番地の壺で出生〉と。

宮古市宮古第六地割字〔あざ〕八幡沖四八番地の一……

戸籍抄本を見て、思わず「へく」となった。

八幡沖とは、いったいどんなどころだったろう。

住居表示の変更のおかげで、八幡沖という地名はなくなってしまうた。

手持ちの資料やインターネットを駆使しても、八幡沖が現在のどこにあたるのか、さっぱりわからない。

さて困った。

八幡沖の八幡は旧郷社の横山八幡宮と考えて間違いない。

沖とはなにか。

海の上だった？

まさか！

辞書を引いてみると、海や湖に限らず、陸地でも、高台から見て平坦で広い低地を沖と呼ぶものらしい。

すると、八幡山から見晴らして、閉伊川の北、旧山口川の南、

二本の川のあいだに広がる一帯を八幡沖と呼んだのだろう。

八幡前と呼ばれた山下一帯と江戸期からあった向町を除けば、いまの末広町、大通一丁目から四丁目、南町にあたる。

そのなかの大通りは、かつて八幡通りと呼ばれた。

八幡沖とは、この八幡通りに沿った地域と考えて大きな間違いはないかもしれないが、それにしても漠然としている。

八幡沖の名が残っているところが一カ所ある。

大通三丁目と南町との境、JR山田線にある踏切の名が八幡沖踏切だ。

これは現地にはつきりと表示されている。

母親に問い合わせてみた。

すると、おまえの生まれたのは黒田町だという。

しかし黒田町は旧山口川の北になる。

黒田町のほうまで八幡沖と呼んだというのは疑問が残る。

〈宮古市宮古第六地割字八幡沖四拾八番地の壺〉とは、いったいどこなのだろうか？

## ■カトリック幼稚園

横山八幡宮が建つ八幡山。

その東麓に広がる一帯は古い町で、かつて八幡前と呼ばれた。

一九六五年（昭和四〇）に新しい住居表示が実施され、宮町（みやまち）一丁目・二丁目になった。

さらに、山口川から西に宮町三丁目・四丁目という住居表示が一九七一年（昭和四六）になって実施された。

前後して国道一〇六号のバイパスを通すために区画整理が行なわれた。

懐かしい景色は、おもむきがすっかり変わった。

八幡山の北につらなっていたノデ山など、あっさりばつさり削られてしまった。

母校の宮高（岩手県立宮古高等学校）と一中（宮古市立第一中学校）は宮町二丁目にある。

それ以前にも小百合（さゆり）幼稚園に一年間通った。

宮町一丁目にあり、カトリック教会に併設されている。

小百合幼稚園と呼ぶより、ぼくの家ではカトリック幼稚園と呼んでいた。

通園には、八幡通りを西へ歩き、宮古駅の前を通って、国鉄の官舎と線路に挟まれた小道を抜けた。

女学校踏切を渡ると、国鉄の？購買部がある道から教会脇の路地に入った。

教会や幼稚園の敷地は生垣で囲まれ、その外側に板を組んだ垣根があったような気がする。

板の頭は三角になっていた。

東側に門があった。

門を入ると、右手に生垣で囲まれた鐘楼があり、礼拝堂がある。

左手には細長い池のある花壇が延びていた。

その先に園長先生の住まいがあった。

シュミドリン神父というドイツ人のような名前の園長先生は、

スイスから来た人だった。

司祭服と呼ぶのだろうか、黒くて長い詰襟の服を着て、胸に十

字架をさげていた。

教室は西側にあり、北側に職員棟があった。

担任はカネコ・キン子先生という不思議な名前だったような記

憶が残っている。

けれど、これはなにかの勘違いかもしれない。

#### \*後記

国道一〇六号の宮古バイパスは一九八四年（昭和五九）七月に

千徳から新川町まで全通した。

のち、バイパスが国道一〇六号となった。

■カラミ

八幡さまの北に連なるノデ山の東側には、かつてラサの社宅が何軒か整然と建っていた。

ラサといっても通じない宮古人が増えただろう。

小山田にあったラサ工業のことで、大煙突に象徴される。

かつて宮古の繁栄の一翼をになう大きな存在だった。

ノデ山下の社宅は、そのラサの重役クラスの人たちが入るところだったらしい。

子どものとき、そういう点はよくわからなかった。

小学生時代に、ひとりの転校生と仲良くなった。

たしかマズギ・ジュン君といった。

字は思い出せない。

一年か二年くらいで、またどこかに転校していったのだと思う。

ふと気がついたら、いなくなっていた。

彼がこの社宅に住んでいた。

ときどき遊びに行くと、上品なおかあさんが、盆に載せて、おやつを出してくれた。

必ずジュースやミルクがついていた。

マズギ君は、ミニチュアカーやGIジョーやレゴ・ブロックのようなおもちゃを、たくさん持っていた。

建物自体は、それほど贅沢な造りではなかったと思う。

ただ、広くて落ち着いた雰囲気に満ちていた。

塀や生垣に囲まれた芝生の広い庭があり、子どもが遊びまわるには十分だった。

門から玄関口までのあいだには白い砂利が敷かれていたような気がする。

そして、その白い砂利と対をなすように、黒く光る粗い砂が、まわりの道のところどころに敷かれていた。

この黒い砂は、カラミとか焼き粉〔こ〕といって、鉾石を製錬したあとに残るカスだという。

ノデ山下以外にも五月町などラサの社宅のまわりの道や空き地で、よく見かけた。

製錬所から運んできたものなのだろう。

ぬかるみ対策にはうってつけだった。

いまの町なかは舗装が行きとどいているし、ラサの製錬所もなくなつた。

カラミを見かけることも、もうない。

## ■ノデ山・ノド山

かつて八幡山の北側には小高い丘が連なっていた。

ゴルフ練習用のネットがあった。

たまにデートのカップルらしい姿もみかけた。

子どものかっこうの遊び場だった。

秘密基地ごっこや崖すべり、隠れんぼ、冬はソリに竹スキー、

雪合戦……

国道一〇六号のバイパスを通すために削られてしまったこの丘を、ぼくはノデヤマと呼んでいた。

漢字では野出山か野手山とでも書くのだろうと思っていた。

最近、ノデ山のある宮町「みやまち」に生まれ育った先輩と電話で宮古の話をした。

たまたまノデ山の話題になった。  
すると、

「ノデ山ではなく、ノド山だよ。

能登半島の能登と書く」

と言って譲らない。

ウーンと、うなづいてしまった。

地元の人言葉は無視できない。

しかし、ぼくのようにノデ山と呼んでいた宮古人も多いのじゃ

ないだろうか。

そのあと先輩と会う機会があったとき、「みやまち」という町内会が出した小冊子を貸してくれた。

なかにノド山の名の由来譚が詳しく出ているので要点を紹介しておきたい。

——一八八二年（明治一五）ごろ、ひとりの若者が旅をして宮古に流れ着いた。

体が不自由で、どうやら兵役を逃れてきたらしい。

新町「あらまち」で米屋をいとなむ伊東という古い家に来て、「働かせてほしい」と言う。

そこで、八幡山に連なる丘で畑仕事をさせた。

若者は太田吉松と名のつたけれど、石川県の能登から来たというのでノトさんと呼ばれた。

やがて、ノトさんが働いていた畑のある丘もノト山、訛ってノド山と呼ばれるようになった、と。

ノデ山は、このノド山がさらに訛ったものだったのだろうか。



■記憶喪失？

中学三年のときだった。

昼の休み時間に学校の廊下で、同級生に突然うしろから肩へかつきあげられて落ち、後頭部を強く打って意識を失った。

いつのまにか保健室にかつきこまれていた。

意識を回復したとき、とくに異状はなかったもので、そのまま家に帰った。

親には報告しなかった。

しかし、どうやらこのとき、記憶の一部をガッポリと失ったような気がする。

どうもそれ以前のことだが、よく思い出せないのだ。

物覚えも悪くなった。

いや、これは生まれつきか……

一中（宮古市立第一中学校）の古びた木造の校舎だったから、頭を打つても鉄筋コンクリートよりはましだった。

この校舎は本校舎と呼んでいたような覚えがある。

一年のときは本校舎の北側、八幡さまの参道側のブロック校舎の二階。

コンクリートブロックを積み上げてつくった校舎だった。

二年のときは本校舎の南側、南校舎と呼んでいたか、校庭側の

木造新校舎の二階だった。

三年の教室は中央の本校舎で、東の階段をのぼった二階の、すぐ左手だったと思う。

階段の右手にも教室がひとつあったような気がする。

このへんの記憶もおぼろげだ。

われながら驚くのは、三年のときの担任の教師や級友の、顔も名前も思い出せないことだ。

だれにかつぎあげられたのかも記憶に残っていない。

校歌さえ忘れてしまった。

思い出せなくても、日常生活のうえで別に困りはしない。

ただ、宮古が懐かしくなって改めていろいろ調べていると、自分自身の昔の一部が思い出せないのが歯痒くて仕方がない。

隔靴搔痒というのだろうか。

たとえば記憶をたぐりよせる網の目の真ん中が、すつぽり抜け落ちていく感じだ。

卒業アルバムでもあればいいのだが持っていない。

最近聞いた話では、どうやら当時の一中に卒業アルバムはなかったらしい。

■ミヤチヨウ

分厚い地名辞典が手もとにある。

角川書店の「日本地名大辞典」の第三巻「岩手県」編だ。

以前、この本の地名編で宮町を調べたら、みつからない。

おかしいなと思ってパラパラめくってみた。

すると、読みが〈みやまち〉ではなく、その前のほうのページに、なんと〈みやちよう〉となつて出ている。

権威あるはずの大辞典がこんな間違いを犯している、宮町は〈みやまち〉である、と憤慨した。

先日、宮町一丁目・二丁目町内会が一九九一年（平成三）に出した小冊子を手にする機会があつた。

タイトルは平仮名で「みやまち」だ。

目を通してみた。

「町内のあゆみ」という年表に、一九七七年（昭和五二）二月一日、市長に対して町名変更を陳情した、という妙な記事がある。

いや、町名や漢字の変更ではなくて、宮町の読み方を〈みやちよう〉から〈みやまち〉に変えてくれという陳情だった。

あとのほうには「〈みやまち〉」という名称こそふさわしい」という文章も載っている。

これを読むと――

一九六五年（昭和四〇）、八幡前に住居表示が実施されて宮町一丁目・二丁目となった。

このとき、市の例規集に振り仮名はなかった。

市民・住民は〈みやまち〉と読み、そう呼んだ。

ところが市のほうでは、いつのまにやら〈みやちよう〉としてしまった。

そこで読み方の変更を陳情する破目になったということらしい。

町の人たちの心情は果たして市に通じたのだろうか？

陳情は一九七七年（昭和五二）のことだった。

一九八五年（昭和六〇）発行の地名大辞典には〈みやちよう〉の読みで出ている。

これを勘案してみると、どうも陳情は成功しなかったのではないだろうか。

## ■二つの宮古

宮古市のほかにも宮古という地名がある。

沖縄県の宮古が、すぐに思い浮かぶ。

宮古群島があり、そのなかに宮古島がある。

行政上は沖縄県宮古支庁で、平良〔ひらら〕市と宮古郡の城辺〔ぐすくべ〕町・伊良部〔いらぶ〕町・下地〔しもじ〕町・上野〔うえの〕村・多良間〔たらま〕村が属している。

この一市三町二村が二〇〇五年（平成一七）六月二日に合併し、新たに宮古市が誕生するというニュースが伝えられた。

ただし、二〇〇四年七月三十一日の時点では、多良間村が加わるかどうか、まだ正式には決まっていないようだし、合併計画自体、実現するのかどうかは先のことでわからない。

宮古市という名称の先輩である岩手の宮古市では、市民のあいだにちよつとした動揺が走ったようだ。

宮古関係のBBS（インターネット上の掲示板）などにさまざまにまな反応が書き込まれていた。

いま名前をあげたなかの沖縄県宮古郡多良間村と、わが町宮古とのあいだには、古くからつながりがある。

江戸時代、みちのく宮古に下町善兵衛という豪商がいた。

その所有する商船善宝丸が江戸交易の帰りに台風にあい、七六

日間漂流して一八五九年（安政六）一月に多良間島へ漂着した。

多良間の島民は二カ月にわたって水夫たちを手厚く介護し、宮古島へ送り届け、全員が奥州宮古に帰郷することができた。

この史実を宮古の郷土史家が発見したのは一九七四年（昭和四九）のことだという。

宮古市は一九七六年一月に多良間村に報恩の碑を建立し、小中学生の交流学習が始まった。

一九九六年（平成八）二月には、交流二〇年を機に姉妹市村になり、それを記念する碑を翌九七年六月に市役所前に建立した。

遠い昔のひとつの出来事によって、遠い北の宮古市と南の多良間村とが結びつく。

その多良間村が新たに生まれる沖縄県宮古市を構成する一員となるかもしれない――

これも不思議な縁というものだろう。

#### \*後記

二〇〇五年（平成一七年）一〇月一日、沖縄県平良市と宮古郡伊良部町・上野村・城辺町・下地町の五市町村が合併して誕生した新しい市の名称は、宮古市ではなく、宮古島市となった。

多良間村は合併に加わらなかった。

## ■三つの宮古とその語源

わが町宮古と沖縄県の宮古のほかに、もうひとつ宮古を名のる地域がある。

三つめの宮古だ。

福島県の西北部、耶麻郡山都町〔やまとまち〕の宮古地区。

山都町のホームページなどを見ると、山あいに開けた集落で、〈宮古蕎麦〉を全国ブランドとして売り込みつつあるようだ。

大字・小字を含めれば、全国にはまだ宮古という地名があるにちがいない。

宮古の語源を調べてみた。

福島県山都町の宮古の語源はわからなかった。

沖縄の宮古は、「元史」温州府誌の一三一七年に〈密牙古と出てくるのが最も古い例だという。

「元史」は中国の紀伝体の歴史書。

密牙古はミヤーク、ミヤコと読む。

ミヤークは方言で、この世を意味する。

宮古という字のものは〈宮処〉で、都のように豊かなところという意味が込められているという。

わが町宮古の語源には、いくつか説がある。

1 閉伊地方の文化・経済の中心地である都↓宮古

2 租税として昆布を納めた屯倉〔みやけ〕があったところからミヤケ↓ミヤコ↓宮古

3 横山八幡宮を祀るミヤ(宮)コ(処)↓宮古

ちなみに、旧郷社の横山八幡宮に伝わる話を掲げておこう。

一〇〇六年(寛弘三)に横山の神官が神歌によって阿波の鳴戸の激浪を鎮めた。

その功績によって時の天皇から都と同訓の宮古と名のることを許されたと――

宮古という名前には深い愛着がある。

沖縄でも山都町でも変わりはない。

どこかひとつの地域が宮古の名を独占することはできない。

沖縄に宮古市が誕生するのなら、それをいきつかけとして、

三つの宮古は姉妹地域の縁組を結んだらどうだろう。

一歩進めて、宮古サミットを順繰りに催し、協力して宮古の名を全国に売りこんでもいい。

#### \*後記

二〇〇五年(平成一七年)一〇月一日、沖縄県平良市と宮古郡伊良部町・上野村・城辺町・下地町の五市町村が合併して誕生した新しい市の名称は、宮古市ではなく、宮古島市となった。



■宮古弁の訳詩

あがとんぼ

あがとんぼを煎ずで飲むずど風邪え引がねえ——  
だれに教「おせ」えられたもんだあが

崩れだコンクリートの壁つこのある焼げあどで

いっぺえ捕ったのを 覚「おべ」えでんが

ガラスだりブリギだりの欠げらつこを掘つくりけえすては

小銭つこ稼えでだった おらがどう

あの日 空地「あぎづ」つつう空地には

あがとんぼが いっぺえいだつたもんだ

つやめいだおっぼ

きらめぐはねっこ

むしった肉は

おにやんまば喜ばせで

おどおを焼ぎ おがあを焼いだ炎が

帰「けえ」つてきたつたような夕焼げ

袋「ふぐろ」さ詰めだもんだあが

籠「かご」さ入れだもんだあが

いっぺえ捕ったあがとんぼ

どうすたったあが

覚「おべ」えではいんねえどもさ

ある人に自作の詩を宮古弁に訳してくれるよう頼まれた。

ほぼ直訳で、こんな詩になった。

むりやり宮古弁的な訛りに置き換えたような箇所もある。

宮古弁ではなんと言うのだろうと考えてわからず、そのままにしたところもある。

おかしいところは教えてください。

■宮古弁訳「あがとんぼ」の原詩

宮古弁に訳した「あがとんぼ」の原詩の作者は、ホームページの「宮古弁小辞典」などを見てメールをくださった未知の方だ。方言による詩集を作りたいという。

プライベートなことはなにもわからない。

ネット上で知り合った人とは、そういうことがよく起こる。

あかとんぼ

大橋晴夫

あかとんぼを煎じて飲むと

かぜをひかない――

くずれおちた

コンクリートの壁のあるやけあとで

だれに教えられたのか

捕みあさったのを覚えている

ガラスやブリキの破片を掘り返しては

あめ代をかせいでいた僕ら

あの日あき地というあき地には

あかとんぼだけが豊富だった

つやのあるしつぽ

きらめくはね

むしりとつたにくは

おにやんまをよろこばせ

父をやき母をやいた炎が

還ってきたゆうやけ

ふくろにつめたろうか

それともかごにいらたろうか

捕みあさったあかとんぼの始末を

覚えてはいない

## ■ウミネコとカモメ

ウミネコは、閉伊川の河口や岸壁に行けば、いつでも会える。名前のおり、「ミヤー、ミヤーオ」と猫のように鳴く。

しかし、目の前に飛んできたやつが、うまい具合に「ミヤー、ミヤーオ」と鳴いてくれるとは限らない。

カモメといっしょに群れていることが多く、ウミネコだと思ってもそれはカモメかもしれない。

カモメはどう鳴くか。

「アー、アー、クワアー、クワアー、キヤー、キヤー」と鳴く……

このウミネコとカモメの鳴き声、実際に聴いてみると、文字で見るほどには明瞭に聴き分けられないような気がする。

どうだろう？

鳴き声で聴き分けられないとすれば、外見で見分けるしかない。ウミネコとカモメの外見上の違いは、ひよつとしたら、宮古の人間でもあまりはつきりとは知らないかもしれない。

自分自身、こんど調べてみるまでは知らなかった。

羽根の色で見分ける方法がある。

ウミネコは **Black-tailed Gull** というのが英語名で、尾羽の全体が黒い。

翼の先端部も黒い。

カモメは黒くない。

くちばしの模様で見分ける。

ウミネコは先端に黒と赤の斑点がある。

カモメは下のくちばしに赤い斑点がある

大ききで見分ける。

ウミネコの成鳥は長さが四五センチほど。

カモメは六〇センチほど。

ウミネコのほうが小さい。

脚の色で見分ける。

黄色がウミネコ、ピンクがカモメ。

さあ、これだけ違いを覚えれば簡単に見分けられるぞ、ウミネコでもなんでも飛んでこい——

ちなみに、カモメ科の鳥は世界に四七種ほどいるらしい。

そのうち日本で繁殖するのはウミネコとオオセグロカモメだけ。

宮古でカモメといえば、オオセグロカモメ（大背黒鷗）をさす場合が多いのだろう。

最近になって、くちばしと脚がオレンジ色で、ひとまわり小さいユリカモメの姿もよく見かけるようになったと聞いた。

ユリカモメの別名はミヤコドリ（都鳥）だ。

宮古にいるなら、宮古鳥だろうか。

## ■宮古八景

八景は、すぐれた景色を八つまとめてあげたもの。

中国の瀟湘（「しようしよう」）八景が起源とされる。

日本では、近江八景・金沢八景などが知られている。

宮古にも八景がある。

宮古八景と新宮古八景との二つだ。

古い宮古八景のほうをインターネットで調べると、わずかに横山八幡宮のホームページが引っかけただけだった。

——横山八幡宮は、和歌を詠む絶景の場所でもあり、宮古八景の一つと数えられ、短歌や漢詩など文学作品が多く残されている。

横山八幡宮のホームページには、こう書いてある。

ほかの七景については、まったく触れられていない。

ただ、なんの説明もなく、高橋子績という人の次のような漢詩が掲げられている。

読み下してみたが自信はない。

横山秋月

自富神風与秀奇

雲晴湖水放光時

重峯撃出一輪月

横山秋月

おのずと富む神風と秀奇

雲晴れ湖水光を放つとき

重峰一輪の月を撃ち出し

秋色江山錦繡披

秋色に江山錦繡を披〔ひら〕く

宝曆十庚辰年代秋

宝曆十年（一七六〇年）庚辰の秋

高橋子績は江戸時代の宮古の漢学者で、代官所の下役を務めていた。

あるとき和賀郡の沢内村に左遷されて、「沢内風土記」を書いた。

「宮古八景詩稿並小序」という著作もあるらしい。

横山八幡宮のホームページに載っていたのはその一部かもしれないが、よくわからない。

まぼろしの宮古八景だ。

新しい宮古八景のほうは、すぐわかる。

- |   |      |   |     |   |      |   |      |
|---|------|---|-----|---|------|---|------|
| 1 | 浄土ヶ浜 | 2 | 日出島 | 3 | 津軽石川 | 4 | とどヶ崎 |
| 5 | 臼木山  | 6 | 潮吹穴 | 7 | 月山   | 8 | 十二神山 |

この八カ所で、選定したのは宮古観光協会。

いつ選定したのかはわからない。

協会のホームページを見ても、ほかのホームページで調べても書かれていない。



■まぼろしの宮古八景

山根英郎さんという方が宮古八景に触れている文章を見つけた。

なにげなく古い「月刊みやこわが町」をめぐっていたときだった。

別のことをテーマにした文章から一部分を引用するのも気が引けるけれど、貴重な一節なので、要旨を引用させていただく。

——江戸時代半ばの一七七一年（明和人）に、村井勘兵衛住頭という盛岡鍛冶町の歌人が宮古を訪れた。

そのとき宮古の文人たちと歓談し、近江八景にあやかっ宮古八景をつくった。

1 横山秋月 2 常安晚鐘 3 藤原夕照 4 黒田落雁

5 黒崎帰帆 6 鋤ヶ崎夜雨 7 白木青嵐 8 黒森暮雪

それぞれに短歌が一首そえられた。

横山秋月には、

秋の夜のひかりはおくの宮古にも

めぐみ隔てぬよこやまの月

以上が山根さんが宮古八景に触れた一節の要点で、ほかの短歌が紹介されていないのが残念だ。

前稿「宮古八景」で紹介した高橋子績は、この場にいたのかど

うかわからない。

横山秋月は符合している。

住頭が宮古へやってきた明和八年というのは、高橋子績の漢詩「横山秋月」の末尾に記された宝暦十年より一一年ほどあとのことだ。

宮古八景というのは、古くからいろいろな人が考え出していたのかもしれない。

常安晩鐘は常安寺の晩鐘。

黒崎は重茂半島北端の閉伊崎だろう。

閉伊崎の尖端には黒崎神社が祀られている。

ふと気づいた、浄土ヶ浜がない。

かわりに臼木山がある。

浄土ヶ浜は、その臼木の青嵐という風景のうちにとけこんで見える。

八景は絵になる情趣をよびおこす言葉とセットになっている。時の流れのなかで失われてしまったものもある。

黒崎に帆掛け船の姿はなく、藤原も黒田も大きく様変わりした。けれど、ほとんどの情趣は当時のままに思い浮かべることができきる。

どの景も捨てがたい。

「まぼろしの宮古八景」とタイトルをつけたけれど、新しい宮古八景とともに、もっともっと知られていいと感じている。

## ■ 臼木青嵐

「まぼろしの宮古八景」で紹介したなかに、

〈臼木青嵐「うすきせいらん」〉

という一景がある。

初夏の臼木山が青葉若葉につつまれ、きらきらと爽やかな海風が吹きわたっている情景が目につかぶ。

臼木山といえば桜の名所だが、当時はまだ桜の木がなかったようだ。

「宮古市史年表」の一九二二年（大正一一）五月七日のところにこうある。

〈臼木山に佐野鋏ヶ崎町長案で桜八百本植樹〉

ところで、「この青嵐は、晴嵐なのではないか？」と拙稿を読んでくださった方お二人から指摘されてしまった。

「えっ」と驚きながら、引用したもとの文章を確認してみた。

まちがいなく青嵐になっている。

「よかった！」と、ひと安堵。

こんどは、宮古八景という発想のもとになった近江八景や瀟湘八景を調べてみた。

すると、こちらでは晴嵐が使われている。

辞書で、青嵐と晴嵐の違いを確認してみた。

青嵐は、初夏の青葉のころに吹くさわやかな風。

もともと日本で（あおあらし）と読んでいたのが、漢語風に（せいらん）とも読まれるようになったらしい。

晴嵐は、夏の晴れた日に山に立つ霞のようなものとある。

これは中国から渡ってきた漢語だ。

臼木晴嵐もいい情景だが、個人的な趣味からいえば臼木青嵐のほうが好きだ。

青嵐と晴嵐――

音がおなじで、字も似ている。

まったくまぎらわしいけれど、意味が違い、情趣も異なる。

近江八景や瀟湘八景が晴嵐だから、宮古八景の青嵐は、ひよつとしたら間違いか誤植かもしれないという気にもなってくる。

江戸期の雅人たちが宮古八景を選んだときの用字は、はたしてどちらだったのだろうか。

残念なことに宮古八景についての資料が手もとにひとつしかない。

いまは、引用した資料のままに青嵐としておこう。

## ■千徳民衆駅

JR山田線で宮古から西の盛岡方面に向かうと、最初の駅が千徳駅だ。

一九三四年（昭和九）一月六日に開業し、一九八二年（昭和五七）から無人駅になったという。

小さな、なんの変哲もない、いなかの駅——  
ところが、これがけっこうおもしろい駅なのだ。

駅舎の入り口に〈千徳民衆駅〉と横書きに墨で記された木の額が掲げられている。

日付は〈昭和五八年六月吉日〉とあるから、一九八三年だ。

揮毫は当時の市長だった千田真一。

民衆駅とは、いったいなんだろう？

駅舎の入り口に向かって左手に、もうひとつ別のドアがある。

夏にはツタにびっしり覆われて見落としかねない。

じつはこれ、〈駅馬車〉という名の喫茶店の入り口なのだ。

駅が無人化されたとき、切符を売ったり改札したりという駅業務の一部を、この地区の人たちが請け負った。

ついでに収益も得ようと喫茶店の経営を始めた。

これが〈民衆駅〉の由来らしい。

いまは駅の業務は行なわず、喫茶店経営のみになった。

番地は、上鼻二丁目七番一号。

上鼻という地名もおもしろい。

カンパナと読む。

調べれば、なにか謂われがありそうだ。

〈千徳の由来〉という看板は出ている。

〈千徳はその昔、中村という地名でした。

ある年、この一帯が大干ばつに見舞われ大変困っていました。

それを見かねた殿様がお城の近くに泉を見つけて人々を救いました。

それにちなんで泉徳と呼ぶようになり、今の千徳に至っております。〉

駅の前は歩いてすぐ国道一〇六号線に出る。

その間わずか二〇メートルほどしかない。

駅前広場だと思っていたら、これがれっきとした公道だった。

県道二〇一号、千徳停車場線という名がある。

残念ながら、日本最短の県道ではなかった。

最短は広島県道二二一号の上下停車場線で、全長七メートルだという。

■緑に埋もれた千徳城址

千徳駅は上鼻「かんばな」にある。

千徳町にはない。

千徳駅よりもっと東、宮古に近い位置に千徳町がある。

旧国道一〇六号に沿った北側だ。

バス停でいうと、宮古駅前から西へ向かって行って下千徳・千徳とつづく。

下千徳のところで、旧国道から斜め右へと道が分かれている。

古い閉伊街道筋で、集落のなかを一本道が貫いている。

右手の民家と民家のあいだの細い路地に折れて入っていくと、

正面の奥に赤い木の鳥居がある。

掲額に八幡宮と記され、ジグザグにつづく狭く急な石段が山の上へと通じている。

例年より厳しい暑さの夏（二〇〇四年）のことだった。

汗を拭き拭き、息をととのえながらこの石段を登った。

山の中腹に、千徳八幡宮があった。

境内は、樹木が鬱蒼とすすぎて見晴らしが悪く、風もあまり通じない。

八幡宮の建物自体は、どうということもない、ありふれた小さな社殿だ。

ただ、ここはかつて館〔たて〕八幡宮とも呼ばれていた。館とは城館のことだ。

千徳氏の拠る千徳城の一部で、南を守る砦があり、さらに北側の一段高い山の上に主郭があったといわれる。

その山へ登ろうとしたが、整備された道はなかった。

あたりは木立ちと雑草が生い繁っている。

細い山道は雑草の海に埋まってしまったのか、捜しても見つからない。

諦めて写真を何枚か撮ると、足もとに気をつけながら石段を下った。

膝が笑いそうになる。

蝉の声がうるさいほどに響く。

道々、もう少し整備されていたならと残念な思いが心をよぎる。

宮古の歴史のなかで、中世から近世への変わり目に位置する、重要な史跡のはずだから。

あとになって千徳城址には別のアプローチがあるらしいと聞いた。

それならそれで、案内板ぐらいあればいいのに、と思う。



## ■千徳城哀話

室町時代というから、年表をみると一三三六年から一五七三年ごろのことだ。

千徳に覇をとなえる豪族があつて、千徳氏を名のつた。

千徳地域はいうにおよばず、山口・黒田から鉾ヶ崎にいたる閉伊川の北がわ一带を支配下におき、河北閉伊氏とよばれた。

閉伊川の南には河南閉伊氏とよばれた田鎖氏がいて、ともに〈閉伊四十八郷の侍大将〉と目されるまでに成長した。

世は戦国期になり、本能寺で明智光秀に襲われて自害した織田信長のあとを継いで豊臣秀吉が台頭する。

関白になったのが一五八五年（天正一三）のことで、その支配の手は一五九〇年（天正一八）になって奥州に及んだ。

一五九一年（天正一九）に秀吉の奥州支配にさからった九戸政実の乱が起こる。

九戸城は、いまの二戸市にあった。

このとき、豊臣方にくみしたのが南部信直だ。

信直は、いまの青森県三戸町にいて、三戸南部氏とよばれた。

南部藩の初代藩主になり、のちに盛岡にうつる。

南部信直は、叛旗をひるがえした九戸政実をうちとるため、千徳城主の実富に出陣を求める。

実富は、これを拒否し、逆に九戸氏に味方して、九戸城に近い一戸城に入城する。

南部・豊臣の連合軍が一戸城を襲い、実富は抵抗むなしく討ち死にする。

翌一五九二年（文禄一）に、千徳城主を受け継いでいた孫三郎は田鎖氏とともに秀吉の命をうけ、はるばるいまの佐賀県へ向けて出陣する。

朝鮮出兵の名目で遠いみちのくから狩り出されたのだ。

歴史の闇に埋もれてはつきりとはしないものの、出陣の途上か九州に渡ってからか、孫三郎は異郷の地で南部氏の手によって謀殺されたものらしい。

そうしておいて、南部信直は千徳城を攻撃する。

城を守っていた遺児の次郎善勝と一族郎党はみな落城する千徳城と運命をともして果てる――

千徳城にまつわるそんな哀しい話が、いくつかの史料によって伝えられている。

## ■岩船の山の奥

タクシーで岩船に向かった。

二〇〇三年（平成一五）の秋のことだった。

目的地の位置は、はっきりしない。

二十何年か前に古ぼけたジープで連れられていったことがあるだけで、道を覚えていない。

ただ岩船の奥、バス停の終点のずっと先の、民家もない山のかなだったと覚えている。

目的地の名は〈芸術の村〉という。

個人の施設だ。

主〔ぬし〕は自称ソynchョさん。

むかしは美学という喫茶店のマスターだった。

山奥に〈村〉をつくりたいと夢を語り、山林の一画を借りた。

深い木立ちを切りひらいて整地し、バンガローや音楽堂、風呂、テントを張るスペースをつくる。

敷地内を流れている小川に水車を設けて発電もしたい。

世界中から旅人を迎え入れたい――

てっきりその夢は挫折したものと思っていた。

それが思い違いだと知ったのは、インターネットで偶然に〈村〉のホームページを発見したときだった。

行ってみようと思った。

ホームページに出ている地図は漠然としすぎている。

二カ所に書いてある住所もくい違っている。

電話はない。

伝言板は記事が古く、ソンチョさんの書き込みもない。

どうやら、ホームページは友人が製作し、運営しているらしい。

タクシーの運転手さんに聞いても、はつきりとはわからないと口ごもる。

山の奥まで入りたくないような感じにも受けとれる。

とにかく、行けるところまで、という約束でタクシーに乗った。

バスの終点を過ぎ、近内「ちかない」川に沿って細い道を登り、地図にあったとおぼしい小さな橋のたもとで降りた。

橋を渡るとデコボコの山道がつづく。

しばらく行くと繁みのなかで黒い物体が動く。

熊——

牛だった。

鉄線の囲いらしきものがある。

山道を浅い流れが横切り、飛び石が置いてある。

その少し先に〈村〉はあった。

■山奥のソンチヨ

岩船の山の奥にある〈芸術の村〉のことは、村のホームページに詳しい。

興味のある方は、それを見てもらったほうが早い。

ぼくはただ、〈村〉を訪ねて心に浮かんだ一連の言葉を書き留める。

これはあくまでイメージ——創作だ。

山奥のソンチヨ

黄葉に埋まった山奥に

ソンチヨはひとり住んでいる

妻もない子供もないが

犬一匹に猫二匹

カスミを食っては生きられないので

畑を耕し木の実を採る

ソンチヨは勤勉な農夫である

電気も電話もないけれど

小さなトラックを持っている

月に四、五日町へ出る

金食い虫のトラックに乗って

古い家を壊しにゆく

山のような廃材から

目ぼしいものを持ち帰る

廃材は息を吹き返し

ソンチヨの家になる

家具になる

みんなを泊める小屋になる

風呂になる

ソンチヨは立派な大工である

満天に星がまたたく夜には山奥で

ソンチヨはひとり宇宙の声を聴く

ソンチヨはひとり宇宙と交信する

■本州最東端訪問証明書

宮古市は本州最東端に位置する町だ。

重茂〔おもえ〕半島の太平洋に突きだした〈とどヶ崎〉が最果て、東経一四二度四分三四秒。

とどヶ崎灯台が建つ。

自然石に〈本州最東端の地〉というプレートを打ちこんだ碑は一九六八年（昭和四三）につくられたという。

〈本州最東端訪問証明書〉を宮古駅や浄土ヶ浜の観光案内所などで売っている。

古いものは持っている。

一九九二年（平成四）に三陸・海の博覧会が開催されたときのものだ。

これの新しいのが欲しくて、先日宮古へ帰ったおり、とどヶ崎に行きもしないうちに駅の観光案内所で買った。

一枚税込み一〇〇円。

社団法人宮古観光協会の発行。

一八二×二五七ミリの大きさで半分に折るようになっている。

とどヶ崎灯台や浄土ヶ浜の写真をあしらい、市内の簡単な観光地図を載せている。

東・西・南・北の本州最端の地を表わした図も載っている。

どうせなら、日本本土と、島を含めた最東端も紹介してほしかった。

調べてみると、日本本土の最東端は、納沙布岬。北海道根室市の根室半島東端で、東経一四五度四九分一七秒。

島を含めた日本本土の最東端は、南鳥島。

東京都小笠原村に属し、東経一五三度五九分一二秒。

ちなみに重茂半島の北端には鳥島がある。

南鳥島に対して、北の鳥島だ。

最東端にもいろいろある。

とどヶ崎は本州の最東端だ。

そのとどヶ崎の位置を再確認しようと、昭文社の「宮古市」という一枚刷りの都市地図を広げてみた。

出ていない。

二万二〇〇〇分の一という縮尺による制限もあるのだろうけれど、市域の全部は載っていない。

東西南北の端っこが、みんな断ち落とされている。

とどヶ崎は市の東端で、しかも南端に近く位置している。

端っこも——

いや、この場合は端っここそ大切なのに、とがっかりしてしまっただ。



■父を送る

先日、宮古で永いあいだ入退院を繰り返していた父が死んだ。  
七九歳だった。

直接の死因は肺炎だという。

長患いで衰弱していた。

食事は咽喉を通らず、口からは水分も摂れない。

点滴で生きていた。

骨と皮ばかりになっていた。

痰がつまって看護師さんに吸引してもらわないと窒息する。

その痰が肺に回って急性肺炎を起こしたらしい。

危篤の報に急いで宮古へ帰った。

どうにか持ち直し、意識を回復した。

当分は小康状態がつづくかと判断して、いったん自分の家へ戻った。

その間に逝った。

二〇〇四年（平成一六）七月二七日火曜。

時刻は午後七時五五分だったという。

つぎの日の朝、父の棺は家に帰った。

通夜に駆けつけた。

通夜といっても仏式ではない、無宗教だ。

翌朝、霊柩車が来た。

黒塗りではなく白のワンボックス。

後ろの扉を引き上げ、棺をレールに載せて滑らせ、ガチャリと固定した。

車は千徳から旧国道一〇六号を東へ、常安寺の火葬場に向かう。館合〔たてあい〕の交差点から左に入って旧街道筋を行くのだらうと思っていると、車はそのまま直進した。

栄町の出逢い橋の通りと交わる新しい道を左折し、旧街道筋にぶつかって右折する。

懐かしい横町〔よこまち〕の通りだ。

昔はこの近所に住んでいた。

火葬場には炉が二つあり、向かって左の炉で焼いた。

焼き終わるまで待合所にいた。

例年にない厳しい暑さがつづき、真っ青に晴れわたった空に煙突から黒い煙が上がり、白い煙に変わり、やがて消えた。

一時間半ほどかかった。

骨壺を家に持ち帰り、みなで会食をした。

家族や縁者、ごく近しい人だけが集まった素朴な別れだった。

宮古の町にはさるすべりの花が目立った。

棺を置いた部屋から見える、うちの庭のさるすべりも、淡いピンクの花をつけていた。

さるすべり父のよすがの木となりぬ (仁)

■常安寺の坂

常安寺の坂「さが」あ

登ってきたがえ

久しぶりだったあ

何十年ぶりだが

歩ぐにはきづう坂だったあ

こええこええ坂だったあ

その坂をす

車がいつぺえ

登ったり降りだりしでだったあ

夏「なづ」だっけえ

墓「はが」参りだがど思つて

焼き場に居だ人さ聞いてみだっけば

いやあ抜け道「みづ」だがす

佐原「さばら」のほうさ——

つて言つてだったあ

昔「むがす」は土のでこぼこ道で

まわりは木ど草べえりで

ひっそりしてだったもんだあが  
ほに変わったがねんす――

常安寺の坂あ

こわがったあ

汗ぬぐって真つ青な空

あおいで見だっけば

煙が上がってだったあ

焼き場の煙突「えんとつ」がら

もぐもぐ もぐもぐど

煙が上がってだったあ

■浄土ヶ浜道で遭難しかけた話

常安寺の墓地のあいだのきつい坂を登る。

日の出町と日影町のあいだの道を下ってゆけば、国道四五号に出る。

国道四五号を愛宕方面へしばらく下ってゆくと、左に、浄土ヶ浜へいたる道がながっている。

浄土ヶ浜の名は、常安寺七世の靈鏡が一六八三年（天和三）ころ、「さながら極楽浄土のようだ」というので名づけたといわれる。

靈鏡和尚がたどった道はわからない。

が、だいたい同じような道筋だったにちがいない。

この道を歩いてみた。

宮古ではめずらしい連日の猛暑だった。

しかも運悪くこの夏いちばん暑い日。

常安寺の坂を登りきるまでは、だいじようぶだった。

浄土ヶ浜道に入ってから、眩暈がし、意識が朦朧としてきた。車では短い距離も徒歩では長い。

路上に木陰は少ない。

雲ひとつない。

陽射しが照りつけ、アスファルトの熱気が身を包む。

ボトルの水は切れ、風もない。

景色を楽しむ余裕など、とつくに失せていた。

行き倒れになるかもしれない、つぎの車が来たら助けてもらおうとまで考えて、うなだれていた顔を上げた――

道の先に赤い自動販売機が見えた。

その向かい側には休憩所らしきものもある。

ほっとした。

ほとんど這うようにしてたどり着き、まず精力剤を一本買って飲む。

健康飲料を三本買う。

冷たいペットボトルを首筋・頭・胸に当てながら日陰で腰をおろして息を整える。

落ち着いて見まわすと、休憩所らしく見えたのはトイレだった。

冬山でなくとも遭難する。

夏の整備された観光道路の上で遭難しかけた。

あやうくオダブツとなって、浄土ヶ浜道を常安寺の火葬場へと  
逆戻りするところだった――

笑い話のようだが、ほんとの話だ。

## ■ 浄土ヶ浜の穴

浄土ヶ浜は観光の穴場。

別の意味でも穴場だ。

日立浜町から浄土ヶ浜の坂を登ってゆくと、ターミナルビルがある。

東側の山下に小石浜（黒石浜）があり、遊覧船の発着所がある。その近くに、穴がひとつある。

八戸穴（はちのへあな）だ。

八戸穴は観光客には知られていない。

宮古の間でも、あまり知らないかもしれない。

海上にぽっかり口を開いた洞窟で、ボートで漕いでいくか泳いでいくしかない。

言い伝えでは、青森県の八戸まで潮の道がつづいている、八戸側には閉伊穴（宮古穴）がある、という。

信じられない話だ。

しかし、そういう穴は絶対に存在しないと切り切れないところにおもしろさがある。

ひよっとしたら……

という気になる。

浄土ヶ浜には、まだ穴がある。

小石浜から北に位置する奥浄土ヶ浜まで六〇〇メートルほど遊歩道がのびている。

その間に二つの穴がある。

隧道だ。

二つとも十数メートル。

すぐに潜り抜けられ、たいしたことはない。

ちよつと凄いののは、奥浄土ヶ浜のレストハウスやあずま屋を過ぎ、もう先にはなにもなさそうなドン詰まりにある隧道だ。

隣りの蛸の浜へ通じている。

二〇〇メートルはあるだろうか。

長く、狭く、壁もでこぼこで、

「これぞ隧道！」

という感じがする。

この穴も観光客にはあまり知られていないだろう。

最後にもうひとつ。

戦時中の防空壕がある。

残念ながら、いまは閉鎖されている。

むかしは開いていて少しだけ足を踏み入れてみたことがある。

真っ暗で、すぐに引き返した。

危険はないはずだから、太平洋戦争の時代をものがたる遺産として整備し、開放したらどうなのだろう。

さらに北側には有名な潮吹穴もある。



ただ、この穴は浄土ヶ浜のうちには入らないから、ここでは深  
入りしない。

## ■潮吹穴

潮吹穴は一九三九年（昭和一四）九月七日に、国の天然記念物に指定されている。

浄土ヶ浜の北、姉ヶ崎の南の崎山海岸にある。

浄土ヶ浜から出ている遊覧船の島めぐりコースに入っている。

宮古観光協会が選定した〈新宮古八景〉にも選ばれている。

南東に、クロコシジロウミツバメという海鳥の繁殖地としてこれも国の天然記念物に指定されている日出島を望む。

潮吹穴のある一帯は黒っぽい岩盤の斜面で、そのまま海に落ち込んでいる。

ある資料によると、波打ち際から一〇メートルほど離れ、平均海面からの高さは五メートル。

穴の深さは二・五メートル、平均幅三〇センチだそうだ。

なぜ潮を噴き上げるのか。

これは、穴の下が空洞になっていて、海に通じているからだ。波が打ち寄せると、その空洞に海水がどっと注ぎ込み、圧縮された海水が穴から噴出する。

噴出する海水の高さは、波の状態によって、ずいぶん差がある。

満潮の穏やかなときで六メートルから一五メートル、荒れているときは三〇メートル以上にも達する。

ただし、干潮で穏やかだと噴かない。

地質学的にいうと、一帯の地質は中生代白亜紀の礫岩だという。そのなかに波打ち際から陸地に向けて一本の節理、つまり割れ目が走っている。

この割れ目に沿って波による浸食作用が進んだ結果、海水面付近では下の部分が深くえぐられて空洞ができた。

さらに割れ目の一部が上下からうがたれて貫通し、穴が開いたという。

潮吹穴と呼ばれるものは日本各地にあるようだが、ほかのところで実際に見たことはない。

宮古の潮吹穴は日本一らしい。

宮古に来たなら、とにかく見にいかなければ話にならない。

六メートル噴き上げるか三〇メートルか、あるいはまったく噴かないか——

それは神のみぞ知る。

## ■ホラ吹き穴

「なあに、てえすたごだあねえ——」

潮吹穴というと、宮古のたいがい人間は、そう言う。

しかし、考えてみれば、国は意味もなく天然記念物に指定などしない。

宮古の潮吹穴が潮を吹く規模は日本一なのだ。

国の天然記念物に指定されているということは、国がそれを保証しているということだ。

なんにでも欠点はある。

潮吹穴の唯一の欠点は、海が静かだと、あまり潮を吹かないことだ。

日和に誘われて見物にでかけても勢いよく潮を吹き上げていないことがある。

現地の案内板には、

〈吹かない日も多く、ホラ吹き穴と呼ぶ人もいます〉

と書かれている。

こんな噂話を聞いたことがある。

もちろん面白半分の話スッコ、作り話にすぎないだろう。

——昔むかし、潮吹穴は、いまの何倍も高く潮を吹き上げていた。

まわりの村では頭を抱えた。

潮をかぶって畑の作物があまり実らないからだ。

どうにかして潮を吹かないようにできないものか？

そう考えた村の人たちは、穴に石を放り込んでみた。

小さい石だと潮といっしょに吹き上げられてしまう。

吹き上げられないよう、しだいに大きな石を運んで投げ入れた。

穴の下の洞〔ほら〕が大きいのか、効き目がない。

それでも大きな石、大きな石と探しだしては運び、どんどんどんどん放り込んだ。

そのうち、とうとう穏やかな海の日には潮を吹かなくなった。

穴からは風の音がひゅうひゅうごうごう聞こえるばかり。

日本一の潮吹きを見ようと遠くからやってきた人たちは、がっ

かりして、〈ホラ吹き穴〉と呼ぶようになった。

## ■むかしの小山田橋

小山田橋は、一中（宮古市立第一中学校）グラウンドの東沿いの通りから、八幡土手を越えて閉伊川に架かる橋だ。

一九七八年（昭和五三）一月二九日に鉄筋の永久橋として開通した。

この橋を歩いて渡っても別におもしろくはない。

車がうるさいだけだ——

こんなことを言うと、妙なやつだと思われるだろう。

橋は対岸に目的とする場所・もの・人が存在するから渡る。

必要があつて渡る。

ただ橋を渡るだけの行為を楽しむ人は少ない。

ところが、ただ渡るだけで楽しい橋というものがあつた。

むかしの小山田橋がそうだ。

かつては木造だった。

鋼線を束ねた太いロープに木の柱を組み、板を渡した板橋で、呼び方として正しいのどうかはともかく、吊り橋と呼んでいた。

車は通れない。

たまにカブ——ホンダの五〇CCが通ることはあつた。

ふつうは人と自転車しか通らず、すれ違うのもやつとだった。

人が走っただけで大きく揺れたから、ユラユラ橋と呼ぶ人もい

た。

台風で増水すると流された。

小学生や中学生のころ、この橋によく行った。

揺らして遊んでいると、通りがかったおとなに怒られた。

橋板に腰をかけて足をぶらぶらさせ、吸い込まれそうな流れや遠くの景色を見ているだけでもよかった。

橋で遊び飽きれば、葦原に分け入ってヒバリの巣を探したり、岸辺の魚を追った。

対岸でも遊んだ。

広い河原、淵や小さな流れがあった。

頭上にはラサの大煙突がそびえている。

本流の底は、えぐれて深いので入れない。

小さな流れにはカツカやカワエビがいて、流れに浸かって素手ですくった。

タモ（手網）が欲しかった。

遊び疲れ、ふたたび橋板の上でジャンプを繰り返しながら戻る。タイミングが悪いとバランスを崩し、川に落ちこちそうになる。あんなにおもしろい橋とめぐりあうことは、もうないだろう。

## ■八幡河原の繰り舟

小山田橋が永久橋になる前は、板橋だった。

その板橋ができる前は、渡し舟が人を運んだという。

一九五八年（昭和三三）ごろまでのことだ。

渡し舟といつても、八幡河原の渡しは、船頭さんが艀を漕ぐものではなかった。

舟に乗っている人が川に張り渡したロープを手繰って対岸に渡ったという。

繰り舟と呼ばれたらしい。

繰り舟を手持ちの百科事典で調べてみた。

出ていない。

インターネットで検索した。

繰り舟という言葉が出ていないことはないけれど要領を得ない。

絵なら見たことがある。

ただ、こまかいところまでは、よくわからなかった。

細長い川舟よりは安定性のある、幅の広い（さっぱ）のような形をしていた。

さっぱは磯漁などで使われる底の平たい小船のことだ。

渡し方は、ただ両岸に張り渡したロープを引っ張るだけという



単純な構造ではなかっただろう。

八幡土手のあたりの閉伊川は、流れが緩やかなようでも流芯はけっこう速くて強い。

舟が流されないような工夫が凝らしてあったはずだ。

まず両岸をつないで太いロープを張り渡す。

これに輪っかをかませて別の短いロープをつなぎ、一端を舟につなぐ。

そうすれば水の勢いが強くなっても舟は流されない。

さらに、もう一本の手繰り綱を引き寄せて舟を進ませ、対岸へ着ける――

想像で書いてみたが、うまくイメージできただろうか。

簡単なようで、こういうことは実際に見た人、乗った人、繰り

船をあやつった人の話を聞いてみなければわからないものだ。

どこかに繰り舟の詳しい記録が残っていないだろうか。

## ■宮古の正しいお盆

宮古のお盆は月遅れだ。

まず、八月一日の夜、玄関前の路上で松の根を焚いて松明かしをする。

盆月に入ったという合図だ。

七日は七日盆。

墓を掃除し、七日火の松明かしをする。

お盆本番の初日一三日には、菩提寺へ行ってロウソクから迎え火を提灯に受け、家の仏壇にともす。

玄関前で松明かし。

一四日、お供えを持って墓参りをする。

墓でも松を焚く。

一五日も松明かし。

一六日、お盆本番の最終日として送り火を焚く。

まだお盆は終わらない。

二〇日は二十日盆、松明かし。

三一日は晦日盆。

いよいよ盆月も終わりだというので最後の松明かし。

松明かしをするときは必ずバケツに水を汲んでそばにおく。

これが宮古の伝統的なお盆のやり方である。

いまは簡単に一三日から一六日までをお盆とする家も多い。

宮古のお盆で忘れてならないものがある。

子どもにとっては、お盆どきの一番の関心事――

花火だ。

松明かしの日には、おとなでも花火をする。

子どもは必ずしなければならない。

宮古のお盆の鉄則だ。

線香花火にネズミ花火、ヘビ・噴き上げ・ロケット・爆竹、それはもう、ありとあらゆる花火をする。

いちばん多くやったのは2B弾という爆竹だった。

マッチ箱の横で先端を擦って、あるいは火にかざして点火し、路上に投げる、空中に放り上げる、かがり火に突っ込む、人の足もとに投げつける。

導火線のついたダイナマイトというのもあった。

赤いパラフィン紙の包みを開くと、一二本？ひと組で、導火線がつながって出てくる。

一本ずつバラして使うところを、つながったまま点火すると、連続して爆発する。

2Bより、はるかに強烈かつ危険だった。

八回もある松明かしの日はババン、ババババツと実に騒々しい。

焚き火と花火の青白い煙が町をつつむなか、宮古のお盆の夜は正しく更けていく。

## ■ 2 B 弾

宮古のお盆に花火はつきもの。

いや、子どものころ、お盆は花火をするためにあった。

夏休みに入るまえにはすでに近所の駄菓子屋に花火が並ぶ。

お盆が近づくと、お盆用品を売る町の商店にも花火が並ぶ。

花火と松の薪は、いろんなところで売っていたような気がする。  
日本各地で夏には盛大に花火が打ち上げられる。

だから、お盆に花火をして、なんの不思議もない。

ただ、宮古を出て関東に住んでみると、とくにお盆に花火をするという風習はないようだ。

少なくとも、宮古のように、お盆のあいだじゅう爆竹が鳴り響いているという現象はない。

ひよつとすると、あのお盆の花火の騒々しさというものは、宮古地方独特のものなのかもしれない。

爆竹の代表が2 B 弾で、2 B と略した。

一円で二本買ったような気がする。

はつきりした記憶ではないけれど、とにかく子どもが気軽に買える値段だった。

朝っぱらから2 B 弾をポケットに町じゅうを駆けまわる。

空き地にある土の山に穴を明け、マッチ箱の横でこすって突っ

こみ、鈍い音とともに土が舞い上がるのを見て喜ぶ。

水に投げこんでも水中でボコツと爆発した。

カエルの口に突っこんだり、ヤンマにくくりつけたりする悪ガキもいた。

蛾の死骸を吹き飛ばすこともやった。

むかしの夏の夜には大きな蛾が、やたらと飛びまわっていた。

家のまえの空き地――

ほんとは旅館の駐車場だったけれど、子どもには遊び場。

もちろん舗装なんかされていない。

そこでもバンバン鳴らした。

すると、旅館のオヤジさんや番頭さんに怒鳴られ、はては追いまわされた。

いま考えれば旅館にとっては迷惑な話だ。

宿泊客も、さぞうるさかったことだろう。

とりわけ、お盆に爆竹を鳴らす風習のない土地から来た観光客など、なにごとかと目をまるくしたにちがいない。

調べてみたら、2B弾は一九六六年（昭和四一）九月一五日に製造中止になったそうだ。

## ■八幡通り

宮古駅前から東へのびる通りを、むかしは八幡通りと呼んだ。  
いまの大通にあたる。

八幡通りから大通に住居表示が変わったのは一九六五年（昭和四〇）のことだという。

ここに小学校六年の途中まで住んで、八幡通り界限が自分の小世界だった。

子供心にも奇妙だったのは、八幡さまの参道でもないこの道が八幡通りとよぶことだった。

大衆酒場養老乃滝（二〇〇四年閉店）の建物には消防の八分団が入っていた。

向かって左側に火の見櫓がいまもある。

右側のわきに路地があり、そこを抜けて宮小へ通った。

裏に朝塚商店という駄菓子屋があった。

眼鏡をかけてちよび髭の、おやじさんの顔を覚えている。

八分団から駅へ向かう道沿いに、山田屋旅館の本館、宮古タクシー（二〇〇九年廃業）、佐々由魚屋が並ぶ。

逆方向に上野製麺所や煙草屋などがあり、少し行つて床屋？の角を左に曲がれば映画館の第二常盤座。

曲がらずに行けば右に食料品の鈴木商店。

その先の角を右に折れると大判焼きの店や映画館の国際があった。

八分団の対面の角地には防火用の溜め池があった。

埋め立てられて空き地になり、駐車場になり、いま飲み屋の入った建物になっている。

横の道路の地下に代わりの防火用貯水槽がつくられた。

地下貯水槽のところから南へ山田線の線路に向かう道沿いの東側には判こ屋の大江堂や松田靴屋、東海自動車の修理工場。

西側に旅館の晃生館、日用雑貨卸の千葉商店、三好食堂、小西煮豆屋、名前を忘れたが旅館が並び、一戸建ての文化住宅のつく一画があった。

八幡沖踏切の手前の左側に魚菜市場があつて賑わつた。

いまは駐車場になっている。

その向かいに小林餅店がある。

大きく東へカーブして踏切を越えれば、閉伊川の土手まで一面に田んぼが広がっていた。

いまの南町だ。

田んぼと鉄道の操車場に挟まれて寂しい道が西へのびていた。

この道は、宮高（岩手県立宮古高等学校）や一中（宮古市立第一中学校）、八幡さまのある宮町へつづく。

八幡通りという名前は、位置的にいえば、この寂しい道にこそふさわしかったのではないかと、いまも不思議に思う。

大通りが八幡通りと呼ばれていた頃、小西煮豆屋さんの先（南）の角を右に曲がって二、三軒目に、いかの形をした最中を売っていた小さなお店があったこと、ジンさん覚えていますか？

〈阿部のいか最中〉というお店で、当時お店には最中しか置いていなかったように覚えています。

最中は一つつ白い和紙の袋に包まれ、ガラスのケースに入っ  
てバラ売りされていました。

餡は小豆餡、白餡、青のりの入った磯餡の三種類。

皮は、香ばしい、いかの味がしました。

以前「おこちゃんのごつつお」のBBS（掲示板）で宮古の銘菓が話題になったあと、ひよっこりその存在を思い出しました。

「そういえば、昔おやつに食べた（いか最中）は、どうしたのだ  
ろう？

話題にもなっていないし、もう今はなくなってしまったのか  
な」

と……。

さっそく翌日、歌舞伎座向かいの、いわて銀河プラザへ。

〈菅田のいか煎餅〉は置いてありますが、やはり〈阿部のいか最  
中〉はありません。



「うくん、宮古の人に聞いてみるしかないかな」

と思っていた二日後、私のもとに荷物が届き、開けてビックリ。送られてきたのは、そう、探していた〈いか最中〉だったのです！

「何か宮古のものを食べさせたいと思って送ったんだーよー」  
という友人のお母さんからの贈り物でした。

不思議、不思議。

どうして私の探しているものがわかったの？

友人もお母さんも、BBSのことや私が探していたことなど、もちろん知りません。

何十年ぶりかの〈いか最中〉は昔と変わらない懐かしい味で、おいしかったです。

大好きな磯館をたくさん食べました。

〈阿部のいか最中〉は現在、大通りから高浜に移転して営業しています。

\*註（じん）

以下、投稿は、伝言板への書き込みを転載したものです。

## ■宮高の歴史

自分の母校である宮高（岩手県立宮古高等学校）の歴史というものを考えてみたことがなかった。

宮高の公式ホームページを覗くと沿革が載っている。

宮高は高等女学校として創立された。

場所は書いていないが、いまの一中（宮古市立第一中学校）のところだ。

現在地に移転した日付もホームページには書かれていなかった。

不明な点は残るものの、ほかの資料でおぎなった大雑把な沿革を、ひとまず書きとめておきたい。

一九二三年（大正一二）三月二三日 宮古町立宮古実科高等女学校として創立

一九二九年（昭和 四）八月一五日 岩手県立宮古高等女学校となる

一九四三年（昭和一八）四月 一日 県立宮古中学校（旧制）創立

一九四八年（昭和二三）四月 一日 県立宮古中学校が県立宮古第一高等学校となる

一九四八年（昭和二三）四月 一日 県立宮古高等女学校が県立

宮古第二高等学校となる

一九四九年（昭和二四）四月 一日 県立第一・第二高等学校が合併し県立宮古高等学校となる

一九五〇年（昭和二五）九月 四日 校歌を制定

一九五三年（昭和二八）九月 一日 宮古市宮古第七地割字中川

原四〇番地に移転

一九六三年（昭和三八）四月 一日 家庭科・商業科が県立宮古

商業高等学校として独立

一九七八年（昭和五三）三月 三十一日 田老分校が県立宮古北高等

学校として独立

一九九七年（平成九）一〇月 一日 校舎大規模改修工事が終了

一九九九年（平成一一）二月 五日 校舎大規模改修二期工事終

了

二〇〇二年（平成一四）四月 一日 全日制課程を二一学級・定

員八四〇名に改訂

二〇〇三年（平成一五）十一月 一日 創立八〇周年記念式典を開

催

二〇〇四年（平成一六）二月 二十九日 「創立八十周年記念誌20

03」を刊行

## ■即席ラーメン記念日

八月二十五日は即席ラーメン記念日だという。

一九五八年（昭和三三）のこの日、世界初の即席ラーメン・チキンラーメンを発売したのを記念し、製造・販売元の日清食品が制定したらしい。

即席ラーメンの誕生日だ。

ほぼ同時代に育ったから即席ラーメンと聞くと感慨がある。

宮高時代など、近くの商店で昼休みに即席ラーメンを買っては  
お湯・丼・箸を貸してもらい、よく食べたものだ。

この即席ということばは、すぐにインスタントということばに  
取って代わられた。

インスタントラーメンというと、ロケットラーメンを思い出す。  
野球帽をかぶった男の子がロケットにまたがった図柄が袋に  
描かれていた。

お湯を注ぐだけのチキンラーメンとは違い、鍋で煮るタイプだ  
った。

宮古以外で見かけたことはないから、あるいはローカルな製品  
だったのかもしれない。

即席ラーメン記念日にかぎらず、世の中には記念日がたくさん  
ある。

憲法記念日、気象記念日、敗戦記念日、学校給食記念日、それにサラダ記念日なんてのもある。

なになにの日というのも無数にある。

霧笛の日、嫌煙運動の日、温泉の日、水の日、蚊の日、果てはコナモン（粉物）の日……

ふと考えた――

宮古独自の記念日、宮古版なになにの日というのはあるのだろうか。

宮古市の魚に制定されている鮭の日はどうだろう。

十一月一日だ。

十一月十一日と書けばわかりやすい。

鮭という漢字のツクリの圭が、十一が重なって見えるところからこの日に制定された。

ただ、制定したのはサーモンランドを宣言した宮古市の関係筋ではなく、新潟県村上市の鮭の日制定委員会らしい。

考えても、ほかに浮かんでこない。

宮古に記念日はないのか。

いや、いろいろあつて、行事も行なわれているにちがいない。

自分が知らないだけなのだろう。

知らないのをいいことに、勝手に認定・制定してみてもおもしろいかもしれない。

■宮古版きょうはなんの日？

宮古の記念日をいくつか考えてみた。

勝手に名づけ、〈制定〉したものが多い。

一月三日 鮭の日——一九七三年（昭和四八）から津軽石川で鮭まつりが行なわれている

二月一日 宮古市誕生の日——一九四一年（昭和一六）宮古町が山口・千徳・磯鶏の三村を合併して市になった

三月三日 三陸地震津波の日——一九三三年（昭和八）、三陸沖で大地震が発生して大津波が襲来、大きな犠牲が出た

三月一二日 超我の日——一九四四年（昭和一九）山田線で列車転覆事故が発生。同僚を救おうとした機関士を讃え、のちに〈超我の碑〉が建立された

四月五日 浄土ヶ浜の日——一九五四年（昭和二九）岩手県指定名勝の第一号に選ばれた

四月六日 啄木寄港の日——一九〇八年（明治四二）石川啄木が宮古港に上陸し、鉾ヶ崎を訪れた

五月二日 陸中海岸国立公園の日——一九五五年（昭和三〇）誕生

五月六日 宮古港海戦の日——一八六九年（明治二二）の、旧暦では三月二五日、日本最初の近代海戦が宮古港で繰り広げられた

八月九日〜一〇日 宮古空襲記念日・非戦の日——一九四五年

(昭和二〇) 米軍艦載機による空襲を受け、死傷者が出た

旧暦九月二日 鞭牛忌(べんぎゆうき)——一七八二年(天明二)

没、七三歳。新里に生まれ閉伊街道の開削・補修に半生を捧げた

九月二〇日 寄生木忌(やどりぎき)——一九〇八年(明治四一)

徳富蘆花の長篇小説「寄生木」の原作者・小笠原善平が死去、二

八歳、山口出身

一月六日 山田線開通の日——一九三四年(昭和九)開通と同時  
に宮古駅が開業した

ほかに、三月二三日の宮古高校など学校・団体の創立記念日  
がある。

宮古港開港の日のように調べても日付がわからなかったもの  
がある。

じっくり考えれば、おもしろい記念日もっと出てきそうだ。

## ■宮古のウニ

中学生か高校生のころ、浄土ヶ浜の浅い海に潜ってウニを一、二個採った。

浜の平べったい白い石に載せ、同じく平べったい白い石で割り、身を指ですくって食べた。

うまかったな、あれは。

ウニの身というのは卵巣で、白い卵が混じっていることがある。毒があるといわれていたので必ず指で除けた。

しかしちょっと待てよ、ウニは漁業権がなければ採れないんじゃないか？

当時はほとんど頭になかったけれど、これは密漁だった。

密漁はいけない！

採りたての生がうまいのはもちろんのことで、ウニの時期に帰省すると必ず生ウニ丼を食べる。

瓶詰めにした塩ウニを熱々のご飯に載せて食べる味も捨てがたい。

アワビの殻に盛って蒸し焼きにした焼きウニも好物だ。

ウニを練りこんだ雲丹「うんたん」ラーメンも宮古にある。

これは比較的新しくできた名物で、まだ食べる機会がない。

宮古の北にある久慈のほうの名物になっているウニ汁のへいち



「ご煮」も食べたことがない。

ウニは宮古あたりの方言ではカゼと呼ぶ。

三陸にはキタムラサキウニ、エゾバフンウニがいて、キタムラサキウニはクロカゼ、エゾバフンウニはボウズカゼとも呼ばれる。

ウニは海藻を食べて育つ。

三陸の入り組んだリアス式海岸に育つ昆布・若布などの海藻類は天下一品だ。

水がきれいなうえ、黒潮・親潮にのって栄養分が流れこみ、豊かに海藻が育つ。

その海藻を食べて育ったウニの味が悪いはずがない。

なかでも重茂「おもえ」半島の外海で採れるウニは絶品とされる。

ウニ漁の口開け（解禁）は、早ければ四月から。

例年は五月から始まり、八月の半ばまで。

当然、旬も、この漁期と重なる。

春から夏の三陸の味覚だ。

それ以外の季節、生のウニには手を出さないほうが無難かもしれない。

## ■港町ブルース

小学生のとき、「骨まで愛して」事件というのを引き起こしたことがある。

城卓也の歌ったこの歌を休み時間にさかんに歌った。

特に、

（ホオネまで〜 ホオネまで〜 骨まで愛して 欲しい〜のよ  
〜）

という部分を、歌い方をまねながら繰り返し歌っていた。

職員室に呼び出しをくらって注意された。

いま調べてみると作詞は川内和子、作曲は文れいじ、一九六六年（昭和四一）に発売されている。

美川憲一「柳ヶ瀬ブルース」、内山田洋とクールファイブ「長崎は今日も雨だった」、鶴岡雅義と東京ロマンチカ「小樽のひとよ」、森進一「襟裳岬」などもよく歌った。

いわゆる御当地ソングだ。

こうしてあげてみると、あとで馬鹿にするようになった演歌にも、けっこう浸っていた時期があったんだと思う。

森進一が演歌歌手のなかではいちばん好きだった。

「襟裳岬」「おふくろさん」など、いまだに知らず知らず、くちずさんでいる。

「港町ブルース」もそうだ。

やはり御当地ソングのひとつで、大ヒットした。

これも調べてみると、一九六九年（昭和四四）に発売されている。

作詞は深津武志（補作詞・なかにし礼）、作曲は猪俣公章。

二番の歌詞のなかに、たった一度だけ、宮古の名が出てくる。

（流す涙で割る酒は だました男の味がする あなたの影をひ  
きずりながら みいなとく 宮古 釜石く 気仙沼く）

この（みいなとく 宮古 釜石く 気仙沼く）のところを、森進一独特の低くかすれた声とコブシをまね、さらに強調して学校の休み時間などに歌った。

中学三年のころだった。

今度は職員室に呼び出しをくらわずにすんだ。

町場に住んでいたぼくが、宮古という町はやはり港町、漁港の町なんだなということを強く意識したのは、この「港町ブルース」に出会ったときだった。

その後、宮古を歌いこんだヒット曲は、ついに現われなかった。

■旧山口川を散歩する

旧山口川は、山口小学校のある鴨崎町と西町との接点で本流と分かれて東へ流れ、中央通りで暗渠に入る。

その間を歩いてみた。

もともとはこちらのほうが山口川の本流だ。

南へ下って八幡さま（横山八幡宮）の裏手で閉伊川に注ぐ流れは放水路だった。

旧山口川の流れは、いま正式にはなんと呼ばれているのか知らない。

仮に旧山口川と呼んでおく。

分岐点から旧山口川沿いに東へ下ってゆくと、右に銭湯の旭湯があり、左に看護学院がある。

その先の西公園の角で南にカキツと折れ、和見町を通る。

このへんは直線的で、川というより、ただの側溝だ。

和見町から二幹線に出ようとする手前で東に大きく曲線を描く。

二幹線を越えると川沿いの道は細い路地になり、川も民家のあいだを抜けてゆく。

生活の匂いが深まる。

駅前通りが西町のほうへのびる通りを越えると、川は末広町の

裏を流れる。

花の木通りを横切り、パン・菓子西野屋の裏から宮古保育園の前を通る。

柵ができて、以前のようにには保育園の庭に入れなくなっているのが寂しい。

扇橋から先も末広町の裏を流れ、やがて中央通りにいたる。

土蔵の外観を模した公衆トイレがあり、そこから先は暗渠に入る。

川と交差する扇橋通りの側溝には蓋がされている。

数十年前は大部分がむきだしで、けっこう幅があった。

側溝をセギ（堰）と呼んだ。

宮古小学校のずっと先のほうから流れてきて、川に落ちた。

むかし、このセギにドジョウがいた。

道から降りてドジョウを探した。

旧山口川には降りなかった。

とにかく汚く、どぶ臭かった。

護岸も高かった。

旧山口川は数十年前と大きく変わった。

欄干があり花壇があり、流れが清らかになった。

ごみや水垢が少なくなり、どぶ臭さも消えた。

これなら川沿いにブラリと散歩してみようという気になる。

■山口川をさかのぼる

山口小学校のまえから北へ、川沿いに道をさかのぼった。

山小のプールの脇あたりは水門があつて川の水が澱んでいる。

それが、さかのぼるにつれ、どんどんきれいになってゆく。

途中、西のほうから小さな流れが合流する。

この流れに沿って行けば遠足で行った覚えのある蜂ヶ沢〔ぼづがさわ〕に着くはずだ。

茶色に塗られた山口公民館のまえで、山口川は、いったん道路の下に隠れる。

その北側でふたたび姿を見せる流れは、透明度をぐんと増す。

さらさらとした清流に目を奪われながら、しばらく歩く。

一本の松の木と、〈曹洞宗慈眼寺〉と彫られた背の高い石柱が現われる。

そこから山口川を離れて右（東）に進むと、山口保育所が見える。

右手に寄生木〔やどりぎ〕記念館があり、慈眼寺がある。

寄生木記念館は、徳富蘆花の長篇小説「寄生木」の原作者・小笠原善平の遺品や資料を展示するため、菩提寺の慈眼寺のそばに建てられた。

旧制盛岡中学校の図書館だったという建物は周囲の緑にとけ

こんでいる。

記念館は閉まっていた。

慈眼寺のまえに人がいたので聞いてみた。

「管理は市の教育委員会なので寺では開けられない」と言う。

あきらめて山の墓地へ登った。

鍬ヶ崎や重茂「おもえ」半島、太平洋が遠く望める場所がある  
かもしれない。

墓地は途中で切れた。

道もない。

木々や下草が繁茂し、掻き分けて進むのは無理だった。

振り返ると眼下に山口の町並みがある。

館合「たてあい」の丘陵や八幡さま（横山八幡宮）の森の向こうに製錬所の大煙突も見える。

小笠原善平が生きていた時代にラサ工業の大煙突はあるはず  
もないけれど、善平も、この墓地に登って町並みや遠くにかすむ  
山々を見たのだ――

そう思うと少し感慨が湧いた。

しばらくたたずんでから急な山道を下った。

#### \*後記

寄生木記念館は二〇一〇年（平成二二）三月で閉館し、遺品は  
新築された山口公民館の寄生木展示室で常時公開されている。

## ■ 山口の慈眼寺

慈眼寺を素直にジガンジと読んでいたら、正しくはジゲンジだという。

漢字の読みはむしろかしい。

山号を如意山というから意のままに読んでいいのかもしれないが……

開創は元龜年間、つまり一五七〇年から一五七三年のあいだ。

武田信玄や織田信長・羽柴秀吉などが活躍していた戦国時代だ。曹洞宗で、本尊は釈迦如来。

場所の字「あざな」を橋場「はしば」という。

鎌倉時代（一一八五～一三三三）の末期には山口の集落ができていたらしい。

同じころに黒森神社ができ、黒森山への登山口の意味で山口という地名がついたといわれる。

位置的にいえば、山口の町並みの北の後背に慈眼寺があり、そのさらに後背に黒森山がそびえている。

慈眼寺の境内に、〈山口小学校の由来〉と彫られた石碑がある。

一九八四年（昭和五九）一〇月吉日に建立されたらしい。

碑文を読む人も少ないだろうから、大意を書き写しておきたい。

——むかしは慈眼寺で寺子屋が開かれていた。



一八七二年（明治五）に学制が頒布されてからは、宮古尋常小学校へ子どもたちは通った。

三〇年後の一九〇二年（明治三五）慈眼寺を仮校舎として山口小学校が創立された。

一九〇九年（明治四二）山口公民館の裏側に本校舎が新築され、独立した。

一九五三年（昭和二八）現在地の鴨崎町に移転――

碑文にある宮古尋常小学校というのは、沢田の常安寺に仮校舎が設けられて創立されたらしい。

小説「寄生木」の原作者・小笠原善平は一八八六年（明治一九）に数えの六歳で小学校に入っている。

宮古尋常小学校ではなく、名称を宮古鍛ヶ崎組合立小学校といい、愛宕にあった。

山口村の家から半里、約二キロの道のりだった。

わざわざ遠くまで行った理由はわからない。

#### \*後記

山口公民館は、二〇一〇年（平成二二）四月に、裏にあった市営住宅の跡地を合わせて建て替えられたから、昔の山口小学校の場所は、ほぼいまの新しい公民館のところと考えていいだろう。

## ■開かずの寄生木記念館

寄生木〔やどりぎ〕記念館は山口一丁目五番四四号、慈眼寺の門前に、一九六九年（昭和四四）六月五日に建てられた。

寄生木は徳富蘆花の長篇小説「寄生木」のこと。

この作品の原作者が小笠原善平。

山口村に生まれ、慈眼寺の墓地に眠っている。

善平は乃木希典〔のぎ まれすけ〕將軍の書生となり、その援助を受けて陸軍中尉になった。

自分は乃木將軍という大樹を頼って成長した寄生木だ、恩人の乃木將軍のことを書き残したい、あわせて寄生木として生きた自分の足跡も残して死にたい――

そう考えて膨大な手記をつづり、「寄生木」と名づけて徳富蘆花に小説化を託し、自殺した。

記念館の建物は盛岡赤十字病院の書庫を譲り受けている。

赤十字病院の書庫になるまえは、旧制盛岡中学の図書庫だった。

石川啄木が、こう歌っている。

学校の図書庫の裏の秋の草

黄なる花咲きし 今も名知らず

土蔵風の白壁が落ち着いた雰囲気をかもしだしている。

なかに善平の原稿をはじめとした資料・遺品、いいなづけの勝

子や蘆花の手紙、自殺に使ったピストルなどを展示しているらしい。

らしいというのは、じつは記念館の内部を、まだ見たことがないからだ。

二度訪ねた。

二度とも扉は閉まっていた。

一度目は行きあたりりばったりだったからしかたがない。

二度目は夏季に常時開館していると聞いて出かけた。

七月末の月曜だったが、開いていなかった。

どうやら開館しているのは八月のみ。

月曜・火曜が休み、祝日の翌日も休館。

ほかの月は教育委員会の生涯学習課に連絡して開けてもらうということらしい。

管理していない慈眼寺に頼んでも、扉は決して開かない。

#### \*後記

寄生木記念館は二〇一〇年（平成二二）三月いっぱいまで閉館した。

遺品は同年四月に新しくできた山口公民館の寄生木展示室に移され、常時公開されるようになった。

旧寄生木記念館の建物は、盛岡の啄木記念館に移される話が進んでいるという。

■ 「寄生木」 あらすじ

宮古の文学「寄生木」が東京の警醒社書店から出版されたのは一九〇九年（明治四二）のこと。

版を重ねたけれど、いまはまず手に入らない。

岩波文庫版全三冊も絶版になって久しい。

読んでみたいのに読めないから、簡単なあらすじを知りたい、という人が多い。

「宮古なんだりかんだり」の通常の文字数内に収まるように、長篇の内容をかいつまんでまとめてみよう。

——原作者の小笠原善平は、小説では篠原良平の名で登場する。

一八八一年（明治一四）六月五日、山口村に篠原良助の次男として生まれた。

父は山口村の村長になる。

公金横領の疑いで訴えられて未決監に六年入獄し、無罪をかちとる。

良平は家出して父が入獄していた仙台へ行き、たまたま陸軍第二師団長として赴任していた大木將軍（乃木希典陸軍中将）を訪ね、その書生になる。

大木將軍の意を受けた、良平と同姓の篠原中佐が後見人となる。良平が陸軍中央幼年学校に三番の優秀な成績で入学すると、篠

原中佐は娘の夏子をいいなづけとしたいとほのめかす。

良平はさまざまな事情で成績が低下してしまい、婚約話はやむやとなるものの、援助の学費を受けとるため月に一度は篠原家に通ったので、交際はつづいた。

士官学校を卒業した良平は、北海道の旭川連隊に配属される。

少尉として日露戦争に出征し、中尉に昇進。

凱旋後、夏子と会って陸軍大学校に入ったら結婚する約束をし、篠原家もこれを黙認する。

陸軍大学校の予備試験には合格したが、勤務日数の不足や若さを理由に本試験の受験を先に延ばされる。

夏子との婚約は、までもこじれる。

良平は病気になって軍を休職。

郷里の山口村へ帰って静養中の一九〇八年（明治四一）九月二

〇日、自殺する。

二八歳だった。

## ■館合の一石さん

一石「いっせき」さんを見にいった。

館合「たてあい」町の旧街道筋から登ってゆく。

時計とは逆回りに、山を巻くように道がついている。

標高は五〇メートルほどだろうか。

公園になっていて、頂上に一石さんが鎮座している。

一石さんのそばには、鎮火の神さま稲荷大明神の赤い小さなほ

こらと二連の鳥居がある。

園内の遊歩道をぐるっと回ってみた。

一郭にトイレやベンチがある。

ふつうの公園のような遊戯施設は見あたらない。

人影もない。

一石さん保存のために整備された史跡公園のおもむきがある。

遊戯施設はないかわり、桜の木が多い。

少し繁りすぎて眺望がさえぎられる。

一石さんは、一石一字経塚、経塚の碑とも呼ばれる。

大きな花崗岩の自然石で、碑の上部に円が彫られている。

その下にある文字は摩滅して一部しか読めない。

横に案内板があった。

それを一通り読み、帰って調べ直した。

石には〈五部大経 一石一字 雲公成之 永和第二と四行に  
刻まれている。

その下に経文を一字ずつ書き写した小石が埋められている。

永和二年（一三七六年）に塚を建立した雲公については不明。

建立年のわかる経塚としては、日本で二番めに古い。

ちなみに最古の一石一字塚は大分県にあり、一三三九年（暦応

二）の日付だという。

また一石さんは、いしぶみの書としても岩手県随一と認められ、

一九七五年（昭和五〇）に県の史跡文化財に指定されている。

岩手県教育委員会のホームページを覗いてみた。

文化財指定時の所在地は、山口第一地割字和見二九。

現在の住居表示では、館合町二九番六号。

一九七五年前には和見の一石さんと呼ばれていたのだろうか。

## ■経塚の碑の案内板

一石さんの横に、市の教育委員会が建てた大きな案内板がある。参考までに原文のまま書き写しておく。

間違いも原文のまま。

### 経塚の碑

高さ 二、六四メートル

巾 一、八五メートル

厚さ 〇、二二メートル

碑の中央に直径五十五センチの日輪が刻まれ その下に四行に「五部大経・一石一字・雲公成之・永和第二」と大書きされています。

この碑は今から五九九年前の永和三年（西歴一三七六年）に雲公という人が建てた碑といわれています

経塚というのは、有難い経文を後世に残すとともに庶民の幸福と国の平和を祈願するため、経文の一字ずつを小石一つ一つに書き、それを埋めて築いた塚のことです。

文化五年（西歴一八〇八年）江戸の有名な文人菊池五山が宮古に来た折この碑を見て「江戸から二千里も離れた奥羽の果てにこんな立派な中国の流を汲んだ字が残されているとは知らなかった」



としばし感嘆したと伝えられ、それ以来広く世に知られるようになりました。

字といい、大きさといい今残っている経塚のうちで全国的に見てもかなり古く最も価値あるものとされています。

種 別 史跡

所 在 地 宮古市大字山口第一地割字和見二九番の一

指定年月日 昭和五十年三月四日 県指定

建 立 昭和五十年十一月九日

宮古市教育委員会

案内文にある菊池五山というのは、江戸時代後期の漢詩人。

高松藩、いまの香川県高松市の出身で、幕末の江戸詩壇で指導的な立場にあった人だという。

菊池寛という有名な作家は、この五山の子孫にあたる。

## ■山口―館合―横山

館合〔たてあい〕近隣公園の頂上、生い繁った木々の間から市内を一望する。

東に市街地と宮古湾や重茂〔おもえ〕半島が見える。

北は山口から黒森山、南には横山八幡宮の森が見え、山口―館合―横山は一線上に並ぶ。

館合山と横山の線上には市立図書館がある。

いまは宮町〔みやまち〕三丁目、かつて図書館のあたりまでは館合と呼ばれた。

沢田にある宮古山常安寺は、はじめ、この市立図書館のあたりにあったらしい。

寺伝によれば、一五八〇年（天正八）に和見の館間〔たてま〕に創建された。

一六一一年（慶長一六）の大津波によって山口から館間にかけての集落とともに流され、一六二五年（寛永二）現在地に再建されたという。

当時、館合は館間と書いてタテマと呼ばれ、和見の一部だったらしい。

和見の語源は、ワⅡ湾、ミⅡ水、湾曲した水辺の意味だという。いまの市街地一帯は閉伊川や山口川の流れこむ河口で、和見は

湾岸にあたっていた。

室町時代（一三三六〜一五七三年）にさかのぼると、千徳氏がいまの町なかの黒田に湊を開いている。

館合や山口が津波で流されても不思議はない。

千徳氏は、はじめ閉伊氏を名のっていた。

閉伊川の北岸一帯を支配し、河北閉伊氏と呼ばれた。

館合に山城を築いていたが、やがて千徳に本拠を移し、館合は千徳城の出城となる。

横山にも千徳氏の館「たて」があった。

館合という地名のもとの館間とは、横山館と山口館の間にあたる地の意だという説がある。

山口館には、小説「寄生木」の原作者である小笠原善平の先祖がいた。

小笠原氏は千徳氏に従った村地頭だったといわれ、その出自をたどれば信州（長野県）から流れてきた武士だったという。

## ■ 館間（合）山

小説「寄生木」には本篇のあとに徳富蘆花がつけた「後の巻」という付録がある。

なかに、原作者の小笠原善平が蘆花にあてて書きながら送らなかったという手紙の断片が載っている。

病気のために陸軍をやめる決心をかため、山口村へ療養に帰った一九〇八年（明治四一）六月ごろの手紙だ。

文中に館間山というのが出てきて、〈たてあいやま〉とルビが振られている。

館間山は当時、小笠原家が所有し、前の年の一九〇七年（明治四〇）冬に父の喜代助から善平に譲られたものだという。

もとは宮古公園地と呼ばれていたらしい。

これは一石さん（一石一字経塚）のある館合近隣公園の前身なのだろう。

手紙には善平が石に腰かけて鳥の声を聞くというくだりもある。

一石さんのことには触れられていないが、善平が腰かけた石は、ひよっとしたら一石さん本体だったかもしれないなどと想像してしまう。

古い石碑などが倒れたままに放置されている例は、よくある。

一石さんの履歴を記した資料は目にしたことがないから、当時の保存や管理の状態などはわからない。

倒れたまま永く放置されていた時期があった可能性もないわけではない。

その二年前、一九〇六年（明治三九）四月に善平は日露戦争から凱旋して宮古に帰省した。

このときのことを書いた「寄生木」の一節には、こういうくだりがある。

へ八幡山と谷一重の山は父の所有だ。

宮古の有力家は父の承認をうけて、年々この山を崩して閉伊川の堤防を築いているのだ

八幡山は横山といって南北に長く、西から東へ流れる閉伊川に突き出すように横たわっている。

その横山の北に連なって、バイパスが通る前、ノデ山があった。

さらに北にはボソ山という山の残骸があった。

鉄道や旧国道が山を削った切り通しにつくられ、削られた山は館合山へとつづく。

こう考えると、館間（合）山から横山へと延びるかつての山並みが目に浮かんでくるようだ。

## ■宮古公園地

前項で紹介した小笠原善平の手紙を引用したい。

改行のない古い候文を現代風に意識し、小説化のために匿名にされたものを実名に戻した。

宮古公園地というのは、いまの館合近隣公園のこと。

——きのうの午後、いばらを分けて宮古公園地に登りましたが、体が弱っているため数十分かかってしまいました。

（徳富蘆花の注：館間山〔たてあいやま〕、もと宮古公園地、のち小笠原家の所有となり、昨年の冬に帰省したさい、父喜代助が善平に与えた山）

眺望がよく、東を眺めると、富める家も誇れる家も、宮古全市をことごとく眼下に見ることができ、閉伊の岬、宮古湾、藤原の松原は遙かに見えます。

南は八幡の古い松が昔のままに繁り、北は水田を経て黒森に対しています。

西は雪のまだ消えない早池峰が見えるはずですが、樹木が立ち繁って、立つてもかがんでも見ることができません。

ほんとうに残念です。

青葉若葉は嬉しいものとはばかり思っていました、時には憾みの種になるものようです。

頂きは三反何畝ほどの広さとか。

石の上に腰かけていると鶯がたくさん鳴きます。

そのほか名を知らない鳥も歌います。

嘘のような話ですが、ほととぎすも鳴いています。

なかでも気に入ったのは、東斜面に老いた松が藤の花に絡まれてそびえていることです。

つたない筆では表わすことができません。

そのうち写真でも撮ったら、お送りしようと思います。

小生は、この宮古公園地をあなたにお目にかけたいと思っています。  
ます。

(以下、散逸)

■私家版「寄生木のふるさと」

「寄生木のふるさと」という小冊子のコピーが手許にある。

著者は川原田尚城〔なおじょう〕さん。

子息の晋さんのあとがきによると、一九七三年（昭和四八）に亡くなられている。

コピーを送ってくださったのは晋さんの弟さん、修さんだ。

A4判・約五〇ページの私家版で、二〇〇二年（平成一四）に再版。

初版の発行年月日の記載はない。

はじめ宮古市役所内で発行する石村清忠さん編集の週刊新聞「庁内PR」紙に一九六〇年（昭和三五）三月から翌年五月まで連載された。

タイトルどおり、「寄生木」原作者の小笠原善平が生まれ育った山口のを中心としながら、小説の内容に触れている。

川原田尚城さんも山口の人で、この本には貴重な証言がちりばめられている。

善平の生家は屋号を花保〔はなぼ〕といった。

一帯の小字〔こあざ〕を久保といい、その久保の突端にあったので端〔はな〕久保、それが転訛して花保になったのではないかと川原田さんは推測している。



川原田さんの家は館〔たて〕、小笠原善平の妹が嫁いだ一段高い上隣りの家は同じ小笠原姓で洞〔ほら〕と呼ばれたという。

善平がピストル自殺したのは、この家だった。

マキあるいはマギと呼ばれる同族のあいだでは、地名や地形的な特徴などによってそれぞれの家呼び分ける習慣が根づいている。

御壇〔おだん〕という小笠原一門の先祖が眠る墓所についても触れられている。

墓を見ると姓が小笠原ではなく北館となっている。

これは藩政時代に盛岡藩主の南部氏によって小笠原姓を名づけることを禁じられたからで、維新を迎えて旧に復したのだと川原田さんは書いている。

小笠原姓を禁じられた理由はわからない。

北館というのは北にある城館という意味なのだろう。

地頭だった小笠原氏が住んだ山口館は、横山―館合から見て北の要衝にあたっていた。

## ■宮古の町は海だった

小説「寄生木」に、おおよそつぎのような話が書かれている。

——伝説によれば、いまの宮古町あたりはだいたいの海だった。

宮古町の中央に七戻〔ななもどり〕という地名がある。

山一重向こうの鋤ヶ崎は、古くからの遊女町。

「行けや鋤ヶ崎 戻れや宮古 ここは思案の七戻り」

と俗にも歌う七戻は、もと波打ち際。

ある日、波が高いために旅人が七たび戻ったあとと言いつづてに伝えられている。

坦々たる大道に沖という地名もある。

宮古から西へ二キロ、馬士〔まご〕が鼻歌で行く長根〔ながね〕

付近ではむかし、黒鯛を釣ったという。

宮古から西北へ二キロ、山に寄った山口の里にも昔むかし海嘯

〔つなみ〕の記念に植えたという一本柳の地名がある。

要するに、蝦夷の時代には、宮古付近は海底だった。

盛岡の東にそびえる兜神岳のふもとから峡谷をうがって東へ東へと流れる閉伊川が太平洋の波濤と押しあって洲をつくり、洲が草原になり、田になり、畑になり、黒田〔ほぐだ〕の村になり、ついにこんにちの宮古町になるまでには、短からぬ歳月が流れた。

この長い月日のあいだに、海は少しずつ東に退き、最後まで踏

みとどまった蝦夷も隠花植物のごとく北に逃れた。

土の下に昔は隠れ、土の上は大和民族の舞台になり、やや久しく生存競争の劇を演じるうちに、善平の祖先が現われる幕となった云々。

七戻というのは、いまの築地一丁目から愛宕一丁目にかけて、愛宕神社のふもとあたりの俗称のようだ。

もとは波打ち際で、波が高いために旅人が七たび戻ったあとと言われると小笠原善平は書いているが、宮古から鋤ヶ崎の遊郭に遊びに行こうかどうかとカネもない若者が迷って行きつ戻りつしたところでもあるのだろう。

黒田を（ほぐだ）と読ませているのも興味深い。

いま黒田町（くろたまち）と保久田（ほくだ）という町が隣り合っている。

稲を植えるまえに鋤き起こして黒々した田をクロタというが、これを方言でホグダといい、保久田はその当て字なのかもしれない。

■オランダ島と女郎島

鍬ヶ崎のおしゃらく(遊女)と、お隣り下閉伊郡の山田町にまつわる話――

美しい山田湾のまんなかに、ふたつの島がぼっかりと浮かんでいる。

大島と小島だ。

一六四三年(寛永二〇)六月一〇日のこと、湾内に一隻の外国船が入ってきた。

オランダの商船で、名をブレスケンス号という。

嵐にあい、水や食料を求めて避難してきたのだった。

大島のそばに停泊したブレスケンス号に代官所の役人が小舟で近づいた。

すると、突然ブレスケンス号は轟音を発して人びとを仰天させた。

歓迎の礼砲だった。

商船とはいえ大砲を何門も装備していた。

おっかなびつくり船にあがった代官は、求めに応じて水や食料の補給を許した。

その一方で藩に知らせるために使者を走らせた。

使者にたった与左衛門は山田から盛岡までの二二八キロを一

昼夜で走り抜き、藩主から〈隼一昼夜〉の異名をもらった。

盛岡藩は早馬を飛ばして幕府の指示を仰いだ。

諸藩の勝手な通商やキリシタンの侵入を恐れて鎖国政策をとっていた幕府は、乗組員の捕縛を命じた。

代官は鍬ヶ崎の遊郭から、おしゃらくたちを呼び寄せた。

そして歓迎の宴を開くからといって船長らを小島に招いた。

ボートでやってきた船長らは、おしゃらくの歌や踊りに喜び、酒に酔い、その隙をつかれて縄をかけられてしまった。

異変に気づいたブレスケンス号は、大砲を撃ち鳴らしながら湾外へと去っていった。

船長らは江戸へ送られ、取り調べのうえ避難や補給が目的だった事実が証明されると、オランダへ帰ることが許された。

のち、大島はオランダ島と呼ばれた。

鍬ヶ崎のおしゃらくたちがもてなしの宴を開いた小島は、女郎島と呼ばれるようになった。

## ■ 女郎島の名は消えた

オランダ島・女郎島の話をも、どこで覚えたのか記憶にない。

山田町のホームページを見ると、女郎島の名は出てこない。

楸ヶ崎のおしゃらくの話もない。

大島をオランダ島と書いた地図はあっても、小島を女郎島と記した地図はない。

女郎島の名は消えてしまったようだ。

ブレスケンス号事件と最近の動きを調べ直してみた。

オランダ商船ブレスケンス号が水や食料を求めて山田湾に來航したのは一六四三年（寛永二〇）六月一〇日のこと。

山田の人たちは温かくもてなし、翌二一日にブレスケンス号は出帆した。

ところが、七月二八日になって、ふたたび入港した。

こんどは盛岡藩の指示で二九日に宴会の場を小島に設けて歓迎し、油断に乗じてコルネス・スハープ船長ら一〇人を逮捕、江戸に送った。

給水目的が事実とわかって釈放されたのは九カ月後だったという。

一九六四年（昭和三九）大島をオランダ島に改称すると町議会で決定された。

一九九三年（平成五）七月二十八日、オランダ船着船三五〇周年記念の説明板と〈ブレスケンス号着船の地〉という標柱を建て、二九日に記念式典を開催。

二〇〇〇年（平成一二）五月一三日、オランダのザイスト市と友好都市のちぎりを結ぶ。

二〇〇二年、山田湾漁業協同組合の所有だったオランダ島を町が二一〇〇万円で購入。

七月から八月には海水浴場が開かれ、県北自動車の渡し船が運航されている。

オランダ島（大島）は無人島で、面積二万六九四五平方メートル、一周一キロ。

白砂青松、タブノ木の自生地として知られる美しい島だ――

こうして見てくると、小島に代わって公式に採用されるには、女郎島の名は響きが悪かった。

正史に載らない一挿話として、女郎島の名は歴史の波のかげに消えたのだろう。

## ■映画教室

宮古小学校時代の思い出のひとつに、映画鑑賞授業がある。

映画教室と言っていた。

授業の一環として映画を見にいった。

初めて見たのは「安寿と厨子王」のアニメーションだったと思う。

町なかを、二列の隊列を組み、隣りに並んだ子と手をつないで映画館まで歩いた。

映画館は国際か第二常盤座のどちらか……

東映という映画館が近くにあったらしいが、これはまったく記憶にない。

調べてみると、「安寿と厨子王丸」という東映映画が、一九六一年（昭和三六）に封切られているから、この記憶にない映画館で見たのかもしれない。

一九六一年というと、ちょうど小学一年のときだ。

父を殺された安寿・厨子王の姉弟と母が都をめぐして逃げる。

途中、悪い男にだまされて母親は佐渡へ流され、安寿と厨子王は人買いに売られる。

ある日、安寿は厨子王を逃し、池に身を投げて死ぬ。

都へ逃げのびた厨子王は、貴人に育てられ、成長すると佐渡へ



渡り、年老いて盲目になった母親を捜しだす――

そんな筋だった。

涙で見た。

「チコと鮫」という海洋映画も映画教室で見た覚えがある。

調べると、スペイン映画・ヘラルド配給で、一九六二年（昭和三七）に公開されている。

南洋の島に住むチコという少年が、珊瑚礁の入り江に迷い込んだ人食い鮫の子と仲良くなり、遊んだり餌を与えたりして過ごす。

その後、成長したチコと鮫が再び海で出会い……

後半は覚えていないけれど、とにかく青く透明な海と真っ白い砂浜とが印象的な映画だった。

そのあとの映画教室の記憶がはっきりしない。

家族と見た、あるいは自分で見た映画と、映画教室で見たものがごっちゃになっているからだろうか。

「十戒」「ベン・ハー」「ファンタジア」「黒部の太陽」などが映画教室で見た作品だったような気がするのだが……

■浄土ヶ浜の、中の浜キャンプ場

浄土ヶ浜に中の浜キャンプ場があった。

いまターミナルビルのあるところから階段を降りてゆくと、観光船発着所のある小石浜（黒石浜）を通り、トンネルを抜ける。

ボート乗り場のある浜があり、休憩所や土産屋さんの入っているマリンハウスもある。

そこがむかし、中の浜キャンプ場だった。

小学生の夏休みに、一年上の隣りのタッコちゃんとふたり、小さいけれど重い三角テントをかついで泊まりに行った。

いまと同じ位置にトイレがあり、前に水場があり、コンクリート製の武骨なテーブルとベンチがいくつか据えてあった。

浜はコンクリートで埋められてはいなかった。

朝、日の出とともに起きて、まだ冷たい海で泳いだ。

早朝の海のなかは驚くほど澄みわたって、小魚やウミウシやヒトデがいた。

小さなウニもいっぱいいた。

このときのタッコちゃんが、のちにフォークグループNSPの一員となってデビューした。

「あせ」「さようなら」「夕暮れ時はさびしそう」と立て続けにヒットさせた。

一時期グループでの活動を停止していたが、二、三年前から再びCDを出したりコンサートツアーに駆けまわったりとバリバリ活動しはじめた。

「ライトミュージック」という古い雑誌の臨時増刊号を持っている。

「NSP」と題され、へこれ一冊でNSPのすべてがOK!とコピーがあり、全篇NSPの記事と楽譜と写真で埋まっている。

「想い出の写真集 中村貴之の巻」には、中学二年のときに同級生とキャンプ場で撮ったという写真が載っている。

このキャンプ場が浄土ヶ浜にあった中の浜キャンプ場だった。

同級生というのも、みな見かけたことのある顔ぶれで、懐かしい。

浄土ヶ浜の中の浜キャンプ場は、知らないあいだに廃止になっていた。

調べてみると、一九六四年（昭和三九）三月九日に閉鎖されたという。

ずいぶん昔で、意外な感がある。

かわりに北の崎山に同じ名前のキャンプ場ができた。

同じ名前というのも妙だけれど、もともとこちらも中の浜といったのだろう。

■ 崎山の、中の浜キャンプ場

いま中の浜キャンプ場というと、崎山にある中の浜キャンプ場をさす。

ここにも泊まりに行ったことがある。

ただ、当時、崎山のキャンプ場を中の浜キャンプ場と呼んでいたかどうか、はつきりした記憶がない。

高校三年の夏休みだった。

こんどはひとりで出かけた。

バスで行った。

いわゆるアウトドア派ではなく、キャンプなどほとんどしたことがなかった。

当時アウトドアということばもなかった。

父が鮎釣りに行くときに使っていたテントが家の物置にあっ  
た。

受験勉強をするわけでもなくぶらぶらしていた気まぐれで、発  
作的にそのテントを引っぱりだしたのだろう。

キャンプをしても、たいして面白いわけではなかった。

キャンプ場の騒々しさは肌に合わなかった。

歩いて隣りの女遊戸〔おなっぺ〕海岸へ行って泳いだ。

きれいな海だった。

キャンプをするなら誰もいないようなところへ出かけたいと、その海を見ながら思った。

大学に入って帰省した夏に、ミントン・ハウスというジャズ喫茶のマスターに声をかけられてアルバイトをしたことがある。

ボーイやカウンターをやってくれというのではなかった。

崎山の中の浜キャンプ場に野菜を売りに行くからついてこいという。

小型トラックに宮町の青物市場で仕入れた野菜や果物を満載して出かけた。

途中のトンネルのなかでパンクした。

マスターがタイヤを取り替えるあいだ、ずっとライトを振って通過する車に合図をした。

キャンプ場の入口にトラックを停めた。

ほとんど売れなかった。

陽の暮れるころ砂浜へ行った。

マスターは焚き火をし、やってくるキャンパーに声をかけた。自分は海を見ていた。

売れ残った野菜や果物は店の裏の倉庫で山になった。

マスターの奥さんがその前で溜め息をついた。

## ■閉伊の語源

宮古市を西から東につらぬく流れを閉伊川という。

重茂〔おもえ〕半島の北端を閉伊崎と呼ぶ。

近隣の田老町・新里村・岩泉町・山田町・川井村・田野畑村・普代村は下閉伊郡に属している。

（後記——田老町と新里村は二〇〇五年六月六日に、川井村は二〇一〇年一月一日に宮古市と合併して下閉伊郡を離れる）

宮古も一九四一年（昭和一六）に山口・千徳・磯鶏の三村と合併して市制を敷くまでは下閉伊郡宮古町だった。

大槌町・宮守村は上閉伊郡。

宮古と盛岡を結ぶ国道一〇六号は、かつて閉伊街道と呼ばれた。

この〈閉伊〉とはなんだろう？

調べてみると、閉伊のもとは閉で、さかのぼると閉という字を使ったらしい。

「続日本紀」という古い官製歴史書の靈龜元年一〇月二九日の条に、こんな記事がある。

——蝦夷〔えみし〕のスガノキミ・コマヒルらが、次のように奈良朝廷に申し出て、許しを得た。

「先祖代々にわたって昆布を献上しておりますが、国府は遠くまでたいへんです。

閉「へい」村に役所を建てていただき、公民として末永く貢ぎ物を納めたいものと思います」

この閉村というのが閉伊地方を表わす広域名称のもとで、閉村は宮古のこともされる。

靈龜元年は西暦七一五年。

そんな昔から宮古地方の昆布は貢ぎ物、つまり租税として納められていたらしい。

ちなみに、これは昆布に関する最も古い記録といわれる。

閉という漢字は閉と同じで、閉じられた、これ以上先はないどん詰まりという意味だ。

三方を山に、前面を太平洋の荒海に囲まれ、何本も川が流れこむ。

内陸や沿岸の集落と結ぶ細く険しい道は自然災害でしばしば寸断される。

主要な産物は昔から昆布。

〈閉伊〉という地名には、中央から見て、遠く隔絶された土地という認識が反映されているとっていいようだ。

## ■念仏峠と山姥

小笠原善平原作の長篇小説「寄生木」に、山姥（やまうば）の一挿話がかかれていいる。

ちよつと文章を変えて引用する。

——宮古の大昔は蝦夷の地で、往来が不便だけに蝦夷が最もおそくまで踏みとどまっていた。

山口から北へ八キロあまり、佐羽根（さばね）の近くには蝦夷館（えぞだて）、蝦夷森という地名が残っている。

その付近に念仏峠がある。

谷向こうの岩窟に、口が耳まで裂けた山姥が住んでいて、旅人は念仏をとなえながら足早に通ったので、この名ができた。

あまり古いことではない。

大和民族がさかんに南から入りこんで跋扈したのちにも、少しの蝦夷は敗者として隔離されて残っただろう。

念仏峠の山姥なども、口ばたに入れ墨をした最後の蝦夷婆などではなかったか云々。

同じような話が、田代にある亀岳（きがく）中学校のホームペー—ジに載っている。

これも文章を少し変えて引用する。

——田代川の下流、佐羽根というところに鍋倉山があり、その



中腹に洞窟がある。

かつて、そこには〈やまんば〉が住んでいた。

やまんばは、洞窟の前を通る人をひとり残らず食ってしまう。

そこで、佐羽根の人たちは、やまんばの洞窟の前を通らないですむように山道をつくった。

それでも近くを通るのは恐ろしい。

田老から来る商人などは念仏をとえながら通った。

いつしか山道は、念仏峠と呼ばれるようになったという。

以上が引用。

念仏峠も鍋倉山も、手持ちの地名事典にはない。

鍋倉という地名は、一般的には頂上が平らで周りが岩壁になって落ち込んでいるところをさすという。

鍋を伏せたような感じなのだろう。

地図を見ると、鍋倉山は出ている。

三陸鉄道北リアス線の佐羽根駅の東方で、崎山や田老との境になっっている。

標高は二四八メートル。

道は見えないが、この稜線のどこかに山姥が住む岩窟や念仏峠があったのだろう。

■佐羽根のやまんば

亀岳中学校のホームページにある「佐羽根やまんば物語」には、  
続いて、だいたいこんな話が書かれている。

——やまんばは、洞窟の奥にある一輪の紫の花を、とても大切にしていた。

それは、やまんばの命そのものだった。

ある日、田代にある館「たで」の八幡さまのお祭りで、一人のおじいさんが賭矢に熱中していた。

夜になった。

そこへ、おばあさんが提灯を持って迎えにきた。

「おがすうな？」

いままで迎えにきたことなどなかったから、おじいさんは首をかしげかしげ、おばあさんといっしょに帰った。

不思議なことに、おばあさんは提灯を持っているのに、おじいさんの後ろばかり歩く。

「前を歩げ」

おじいさんが何べん言っても返事ばかりで前を歩こうとしない。  
い。

一本橋まで来た。

いつもならよたよた渡るおばあさんが、きょうはすいすい渡り

はじめた。

おじいさんは偽物だと気づき、矢を射た。

おばあさんの偽物は真つ逆さまに川へ落ちた。

急いで家に帰ったおじいさんは、本物のおばあさんといっしょに、家じゅうをかたく戸締まりした。

しばらくして、やまんばがやってきた。

「ばさま、じさま出せ！」

ばさま、じさま出せ！」

一晩じゅう戸をたたきながらうめいていたやまんばの声が、日の昇るころに、ぱたりとやんだ。

戸を開けたおじいさんとおばあさんは、戸の外にやまんばの死骸をみつけた。

やまんばの洞窟にあった一輪の紫の花も、そのころ、ほろりと散ったという。

## ■ 亀岳中学校が消える

田代の中里にある亀岳（きがく）中学校が、二〇〇五年（平成一七）四月、一中（宮古市立第一中学校）へ統合されるといふ。

現在の生徒数は一二人。

一年生四人、二年生五人、三年生三人だ。

来年三月には三年生の三人が卒業する。

廃校にならずに、四月に亀岳小学校から、いま六年生の四人が上がってきたとしても、一三人の小規模校だ。

亀岳中学校は、一九四七年（昭和二二）四月に一中の亀岳分室として創設された。

翌年四月に一中から独立して宮古市立亀岳中学校となり、小学校との併設校になった。

五七年の歴史を持っている。

これは亀岳中学校のホームページで得た知識だ。

行ったことがなくとも、このホームページを見ると学校の今や昔がよくわかる。

田代がどういふ土地かということも、よく伝わってくる。

標高一〇〇〇メートルを越える峠ノ神山や亀ヶ森（亀岳山）が西にそびえ、そこを源流とする田代川が東へ流れる。

豊かな自然のなかに鳥や動物たちが息つき、澄んだ空気に満天

の星が輝く。

さまざまな伝説・言い伝えがリアリティを持ち、田代神楽や剣舞などの伝承される民俗芸能の里だ。

その一方で、過疎に加えて少子化が進んだために廃校を余儀なくされ、子どもたちが遠い市街地の学校まで通わなければならなくなるという現実がある。

中学校がなくなると、ホームページも消える。

田代にともっていた灯、世界に開いていた窓が、ひとつ消えてしまう。

そんな感じがする。

センチメンタルになってもしょうがない。

亀岳の子どもたちは活発だ。

ホームページには生徒会で決めたというスローガンが掲げられている。

いわく、——有終の美！

校舎は小学校の校舎として残る。

## ■馬場の機織り滝

亀岳中学校のホームページに「田代の七不思議」という話載っている。

前に紹介した「佐羽根やまんば物語」は、そのなかに入っている。

残った何本かの話も自分なりのかたちで紹介していきたい。

興味を覚えた方は、亀岳中学校のホームページを見てほしい。

ホームページのアドレスを記しておく。

<http://www.rnac.ne.jp/~kigaku/>

ただ、来年（二〇〇五年）三月の廃校とともに、このアドレスも使われなくなるのだろう。

——田代は田代川に沿った山里だ。

馬場〔ばんば〕というところには馬場ノ滝がある。

その少し上流に馬場ノ滝より小さな滝がある。

幅二・五メートル、高さは一・五メートルほど。

この小さな滝へ行くには、急な坂道を登ったり降りたり、草むらをかきわけたりして歩くしかない。

道を探すのも、ひと苦労だ。

まわりには木がたくさん生えている。

昼でも暗く、深さ二メートルほどの滝壺のなかは真っ暗。

以前は、いまの二倍も三倍も水が落ちていた。

いま岩が見えているところにも水が流れていた。

高さよりも幅が広くて、まるで機〔はた〕で白い布を織っているように見えた。

水の落ちる音が機を織るようにも聞こえた。

昔むかし馬場に機織りの好きなひとりの年若い女が住んでいた。

ある日、女はこの滝壺に身を投げて死んでしまった。

それから機を織る音が滝から聞こえるようになった。

ぱたん しゅー ぱたん しゅー……

ぱたん しゅー ぱたん しゅー……

どういう理由で女が滝壺に身を投げたのかは、だれにもわからなかった。

いつしか村の人たちは、この滝を機織り滝と呼ぶようになった。

## ■義経の草履

田代の中里から西へ、車で五〇分、さらに歩いて一時間半ほど入った山のなかに、小さなほこらがある。

ほこらのなかの石には亀岳山大明神と刻まれている。

その石の下に、金属でできた草履がある。

長さ二〇センチから二五センチ、幅一〇センチほど。

これが義経の履いていたといわれる草履だ。

義経とは、平泉から逃れてきた源義経のことだという。

亀岳山大明神と刻まれた石の左右に、蛇と獅子の石像が一對ずつ置かれている。

そのまわりには、金属でできた剣がたくさんある。

ほこらの前には賽銭箱のような入れ物が置かれ、なかにはむかしのお金も入っている。

ほこらへ行く途中に、もうひとつ別のほこらがある。

そのほこらにお供えものをして、それから草履のあるほこらへ行く。

すると、戻ってきたときにはもう、お供えものがなくなっているそうだ。

旧暦の四月二三日には亀ヶ森神社のお祭りがあって、たくさんの人が参詣に訪れる。



なぜこの日にお祭りが行なわれるようになったかはわからな  
い――

これは義経北行伝説のひとつだ。

宮古にもいろいろ伝説があるが、この亀岳山大明神の話はあま  
り知られていない。

徳富蘆花の小説「寄生木」には、こんな話がある。

原作者の小笠原善平の祖母は、山口から北方三里の佐羽根から  
嫁いできた。

旧暦四月になると、生まれ育ったところの熊野さまへお参りに  
ゆく。

その道中に善平がついていったとき、祖母は語った。

「もう石僧主〔いしぼっち〕に来たなア。

この石を見なさろ。

むかし源氏の義経さまが蝦夷さ隠れるどぎ、武蔵坊弁慶が負ぶ  
つてきて建てた石ちうこんだ。

義経さまも、ここ通ったんだべなア。

……来年は氏神さまのときにも来られんめえよ。

歩けなかんべえもの」云々

石僧主は石坊主か。

とにかく、佐羽根にイシボッチと呼ばれる石があり、それは義  
経の家来の弁慶が、どこからか背負ってきて建てた石だという伝  
説があったらしい。

■おがんぶづ

つぎに紹介する「おがんぶづ」の話も、源義経にまつわる、あまり知られていない話だ。

——田代の吾妻に館八幡宮がある。

昔むかし、そこには田代城という城館があつた。

城館には、はちまん太郎と、おがみが住んでいた。

おがみというのは、おかみさん、奥さんのことだ。

はちまん太郎というのは源義経のことだといわれている。

あるとき、はちまん太郎が言った。

「戦さに行く」

はちまん太郎は戦さにでかけた。

おがみは、はちまん太郎が戦さに勝つようと念じて、川の淵

へ身を捧げた。

そのとき、どうしたわけか、一羽のにわとりを胸に抱いていた。

はちまん太郎は、どんどんどんどん勝ち進んだ。

とうとう津軽の海を越えて蝦夷（北海道）まで行った。

そんな噂が伝わってきたけれど、その後のはちまん太郎のこと

はわからない。

田代では不思議なことが起こっていた。

おがみが身を投げた淵はとても深いんだが、そのまんやかに笠

をかぶったような石ができた。

それは、おがみだと言われた。

不思議なことは、まだ起こった。

夜、川沿いの道を通ると、にわとりの鳴き声が聞こえるようになった。

いつしか村の人たちは、おがみが身を投げた淵を（おがんぶづ）と呼ぶようになった、という。

（おがんぶづ）とは（おがみの淵）という意味だ。

田代館跡は吾妻集落の東にある。

田代氏の本姓は佐々木源氏とされ、源義経と関わりなくもない。

閉伊氏の一族だが、南部氏の家臣桜庭氏が千徳の河北閉伊氏を討ったときには桜庭側に味方したらしい。

## ■学校の下の骨

亀岳小中学校の下には骨が埋まっている――

そんな噂が田代にはある。

噂の内容は二種類に分けられる。

1 体育館の下に人の骨が埋まっている

2 牛や馬の骨が埋まっている

亀岳小中学校は併設校だ。

学校のある場所にはむかし墓地があった。

校舎を新しく建てるとき反対する人もいた。

多数決で建てることに決まった、という。

中学校の廊下あたりまで山だったそうだ。

いまの校舎を建てるときにその山を削ったら、たくさんの馬の

骨が出てきた。

このあたりはむかし、〈そま捨て場〉だったからだという。

そこから、たくさんの缶詰も出てきたそうだ。

日本が戦争をしていたころ、学校の川向こうに兵隊の演習場があった。

その兵隊たちが山に隠していったのではないか、ということだ。

これは亀岳中学校のホームページの「田代の七不思議」に出て

いた話で、以下は余談。

〈そま捨て場〉というのがよくわからなくて、手もとにある紙の辞書・事典類で調べてみたが、出ていない。

インターネットで検索してみると、ふたつだけヒットした。

ひとつが亀岳中学校のホームページだ。

もうひとつが「三東のページ」というホームページにある「東

京方言集」だった。

そこにこうあった。

〈ソマ…馬の屍体（多摩地方の方言）

例…そま捨て場〉

関東の多摩地方の方言だという。

田代では〈そま〉とか〈そま捨て場〉という言葉は、ふつうに使われているのだろう。

もし多摩地方の方言というのが正しいなら、これは兵隊たちが持ち込んだ言葉なのかもしれない。

## ■石割り白樺

盛岡には石割り桜がある。

田代には石割り白樺がある。

これは伝説ではなく、ほんとの話だ。

亀岳中学校のホームページには、こんなふうに書かれている。

——石割り白樺は、中学校から亀ヶ森方面に車で五〇分ほど行った道路つぱたの、少し高いところにある。

亀ヶ森の頂上から見ると東方にあたる。

五〇〇メートルほど手前の道路つぱたには白樺の林がある。

石割り白樺のまわりにはなにもない。

一本だけだ。

大きな石が二つに割れ、その割れ目から白樺が生えている。

木の高さは約四メートル。

石の直径は約一メートル。

石割り白樺ができたわけを、生徒たちは、理科の巢内先生に聞いた。

——まず、なんらかの理由で大きな石にひびが入った。

風に飛ばされた土が、ひびに入り込んだ。

そこに白樺の種が風に乗ってきた。

つぎの年、白樺の種が芽生え、根を伸ばした。

根から出る酸で、石がほんの少しずつ溶けていった。

さらに根が太くなり、ひびが広くなった。

それが何十年も繰り返されるうちに、大きな石がまっふたつに割れた。

白樺はさらに大きくなった。

盛岡の石割り桜は、ビルのあいだにある。

田代の石割り白樺は、自然のまんやかに生きている。

亀ヶ森の一本桜ほどには知られていないけれど、知る人ぞ知る、田代の名木だ。

ただ、道路つぱたの小高いところにあるから、車で行くと、知らずに通り過ぎてしまうかもしれない。

■むかしの遠足

むかしの遠足は、ただ歩くだけの遠足が多かった。

いまの遠足のように目的地に行って遊んでくるというものはなかったそうだ。

亀岳中学校の遠足のコース。

だいたい三つあった。

ひとつは、学校のある中里から箱石・明塚・小峠・八川を通り、また学校に戻ってくるコースだ。

「こえー、こえー」

疲れた、疲れた。

そう言いながら歩いたそうだ。

つぎは、学校から佐羽根を通り、松月「まつつき」という崎山の海岸まで行くコースだ。

むかし、山に囲まれた田代の子どもたちは、海を見ることが、あまりなかった。

このときばかりは思う存分に楽しんできたそうだ。

最後は、学校から芦原平「あしばたい」まで行き、そこから北ノ又・亀ヶ沢を通って亀ヶ森まで行くコースだ。

帰りは下り坂が急で、行きよりもはやく着いたそうだ。

おまけ――



遠足のコースではないけれど、よく遊びに行ったのは、繋ヶ沢の上にあった芝生のところだ。

そこは少しだけ広くなっていた。

いっぱい遊びまわれたそうさ。

ぼくの記憶でも、遠足ときは、ほんとによく歩いた。

花輪の閉伊川原、山の中の蜂ヶ沢、日出島海岸……

目的地に着くと、お弁当やおやつを食べた。

けっこうあたりを駆け回って遊んだ。

帰りは、ほんとに「こえー、こえー」だった。

■雄又峠

田代から宮古へ行く道というのは、むかしは一本か二本しかなかったという。

むかしは山道で、ふたりが並んで、やっと通れるくらいの細さだった。

歩いて宮古まで三時間かかった。

南にある雄又峠〔おまたとうげ〕というのは、田代に三台しかなかった車の通った跡が道路になったのだそうだ。

その三台の車というのは、田頭林業と中里林業と皆川林業のトラックだった。

歩いて宮古へ行った人たちは、そのトラックの荷台に乗って帰ってきた。

その当時は、トラックで雄又峠を通っても一時間半くらいかかったそうだ。

いまは雄又峠も舗装され、宮古へは車で二〇分もあれば着いてしまう――

以上で亀岳中学校のホームページを参照した一連の話を終える。

雄又峠というのは市の北西部、田代地区と市街地のあいだに位置する。

標高四一〇メートル。

材木を運ぶトラックというのは、鼻の長い、いわゆるボンネット・トラックだった。

みんな濃い緑色の塗装をしていた。

材木を荷台いっぱい積んで、でこぼこ道をがたがた走っていくのを、むかしは宮古の町なかでもよく見かけた。

そういえば、町なかにも材木屋さんが多かった。

敷地が広く、大きく太い材木の山がいくつもあって、いい遊び場になった。

そういう材木屋が近所に三軒はあった。

材木の山に登って遊んでいても、注意されたり、追い出されたりしたということはない。

むかしは鷹揚というか、のんびりしていたものだった。

四輪駆動、あるいは六輪駆動のボンネット・トラックは、材木屋というより、山から木を切り出してくる××林業というようなところで主に使われていました。

私のうちは昭和五年（一九八〇年）まで、ゼーもぐや（材木屋）、すなわち製材所でした。

昭和四〇年（一九六五年）ぐらいを境に普通のノーマルなトラックになりました。

というのは――

近隣の山の木は××林業さんから丸太のまま仕入れます。

切り出した丸太を積んでオフロードの林道を走るには、どうしてもヘビーデューティーなトラックが不可欠でした。

途中からは外材が多くなり、製材所ではあの手のいかついトラックは不要になったのです。

ボンネット・トラックは多くが、いすゞ製でした。

当時の山間を走るバスやトラックは、ほとんどが同じような顔をしていましたね。

この夏、帰省したとき、蜂ヶ沢〔ぼづがさわ〕で見かけたトラックは、すごかった。

まさに四〇年ぐらい前の六輪駆動のいすゞ。

ほんとうにクルマを愛している人が大切に乘っているトラック、という気がしました。

■お念仏さん

ぼくのホームページの伝言板に宮古の祭りの話が載った。

返信を書き込んだ。

続いて何人かの人が返信を書き込んでくれた。

話は意外な方向に進んで、〈いだこさん〉や〈お念仏さん〉の話題になった。

いだこさんは、下北半島の恐山で有名な巫女で、いたこのこと。

お念仏さんというのは初耳だった。

人が死ぬと、お坊さんとは別に女の人がやってきて、念仏や経をととえ、押んでくれる――

お念仏さんは、そういう存在であるらしい。

お弔いが出たうちの人が呼ぶ場合もないことはない。

しかし、ほとんどの場合、突然訪ねてきて仏前に座り込み、念仏をととえだす。

家の人は当惑する。

その当惑をよそに一時間も二時間も念仏をあげている。

「お念仏さんだあが」

焼香に来た人が、そう教えてくれる。

長い時間ありがたい念仏をととえてもらって、ただ帰すわけにもいかない。

礼を言い、とりとめのない話をする、お膳を出す、心づけを包む。

葬式が何日にもわたると毎日やってくる。

一人より三人、五人と集団で来ることが多い。

外見は、ふつうのおばさん・おばあさん。

地味な目立たない服装をしている。

これは、念仏や読経を練習する会がいろいろなところにあって、お弔いが出ると、寺から連絡がいつたり、亡くなった人の親戚や友達、近所の人など近しい人のだれかが連絡するのだという。

実際にお念仏さんが念仏をとなえている場に遭遇した経験はない。

しかし、そう聞けば、なるほどと妙に納得してしまう。

そういう存在もあるのだろうか。

宮古の土俗的な慣習・伝統の奥深さというようなものを感じさせられる話だった。

■ いだこさん

恐山で知られるいたこが宮古にもいる。

いだこ、いだごと訛って呼ばれることが多い。

神降ろしや湯立ての占い、死者の口寄せなどをするプロで、巫女や神子と書いたりする。

袴に蚊帳のようなグリーンの上衣を着けていたり、紫の袴に白い上衣、白の頭巾だったりと見た人によってさまざまだ。

とにかく異形の者という雰囲気強烈に漂わせているものらしい。

たけのこ族のような衣裳と表現する人もいる。

ご祝儀は、お気持ちだけ……。

少し調べてみたら、いだこさんはいろいろなことをするようだ。

小正月の一月一日に、おしらさまを祀る家に地域の女たちが集まり、いだこさんと呼んで託宜を聞き、会食する慣わしがあり、これを、おしらさま遊ばせという。

春祈祷といって、二月ごろの良い日を選んで家にいたこさんを招き、その年の無病息災を祈祷してもらおう。

新築や井戸掘りのさいの地鎮祭、船をつくるときの船霊祓い、病人の祈祷、憑きもの落とし、葬式の跡清め、祭りへの参列、すでに書いた神降ろしや仏降ろし、神社での湯立ちの神事などなど。



市内に山野目・扇田・松浦、田老に西野、岩泉にも愛野・小成・浅沼というような家系のいだこさんがいて、〈いだこや〉という屋号で呼ばれる場合もある。

川島秀一さんという人の書いた「漁撈伝承」（法政大学出版社）という本には津軽石のいたこのことが出ている。

——宮古市津軽石に中島ハツという神子がいる。

一九一〇年（明治四三）の生まれだ。

お船霊の祭文を伝承しているが、彼女はこの祭文のことを、エビス直しと呼んでいる。

エビス直しとは、漁師の言葉で、今まで漁が続いていたのが突然とぎれたときなどに、神子のところへ行ってお祓いをしてもらい、回復をはかることをさしている。

以上が「漁撈伝承」にあった大筋。

いたこと聞くと、なにやらおどろおどろしいけれど、お念仏さんと同じように、宮古の文化の奥深さを感じさせて興味深い。

■ トウキビ

きょう、この秋はじめてトウモロコシを食べた。

ふと思った。

宮古ではよく食べたなあと。

しかも、トウモロコシと言うよりは、トウキビ、キビと呼んでいたことも思い出した。

生を自分のうちで茹でるような面倒はあまりしなかった。

末広町の川目商店などの店先で、皮にくるまれたまま、ふさふさの毛がついたままのやつを大釜で茹でて売っていた。

買うと新聞紙に包んでくれた。

湯気がたっているのもうまいけれど、冷めてもうまい。

おやつに食べた。

運動会や遠足のときも、稲荷寿司やおにぎりや梨や栗などとともに定番だった。

皮を剥いて毛をむしり、そのままかぶりつく。

口のまわりが汚れるのも気にせず、むしゃむしゃ食べる。

これがうまい。

多少の食べ残しも気にせず、ポイツと芯を捨てる。

ぽい捨てはいけませんが……

ご飯にかけてもうまい。

まず一列か二列を歯で起こして食べ、あとを手でほぐして器に入れる。

醤油をさっとかける。

スプーンですくって、ほかほかのご飯にかけて食べる。

いまは生を買ってくる。

親戚から送られてくることもある。

一本二本茹でるのはやはり面倒で、電子レンジでチン！

粒立ってムチムチした食感のトウキビが簡単に食べられる。

ああ、鮮やかに黄色いトウキビ、白黒だんだら粒のキビ……

うーん、これは宮古ではとか、昔はとかいう問題じゃなくて、

ただ自分がトウキビ好きだというだけかもしれない。

ドンとかドン屋といって、ポップコーンをつくってくれる屋台

がリヤカーで町なかを回ってくることもあった。

これはあまり好きではなかった。

いまはドン屋など回ってくることもないだろう。

そういえば、真夏に浄土ヶ浜の売店などでよくトウモロコシを

焼きながら売っている。

あれは昔の宮古にはなかった。

## ■大判焼き・小判焼き

国際という映画館のまえから北へのびる道沿いの東側に、大判焼きの店があった。

地図でみると大通二丁目四番あたりだ。

鉄板の丸い型に溶いた小麦粉を流し込み、小豆の餡を入れて焼いた素朴な菓子。

ガラス戸のなかで、ときどき千枚通しのような器具を使って、ひとつひとつ引っくり返していた。

一個一五円だったような気がする。

おでんもあった。

店内にはデコラの安っぽいテーブルと椅子が置かれ、奥にはコの字型に座席があった。

あまりきれいではなく、おでんの汁や味噌のしみがついた古い雑誌・新聞が、無雑作に置いてあった。

屋号ははっきり記憶にないけれど、甘太郎といったかもしれない。い。

その近く、大通に面した三丁目一番二八号あたりに、みやこ饅頭という大判焼きを焼いて売る店が、あとになってできた。

「みやこ」は宮古ではなく、都と書いたかもしれない。

はっきり言って、あまりうまくなかった。

大判焼きの店は、宮町の女学校踏切の近くにもあった。

いまの出逢い橋の宮町側もとあたりの西側だ。

屋号はわからない。

おでんもやっていた。

宮高（岩手県立宮古高等学校）時代、学校帰りに入った。

味は国際近くの店のほうが好きだった。

お焼きというのもあった。

一中（宮古市立第一中学校）の近くの、民家の軒先というか庭先というか、道路に面して作りつけの屋台があった。

女学校通りの、いまは国道一〇六号（バイパス）が通ってしまつたあたりだろうか。

八幡前に住んでいた人の話によると、〈緒方さんの栗焼き〉と  
いったそうだが記憶にない。

立つて焼きながら売るスペースだけで、席に座って食べられるようにはなっていなかった。

大判焼きより小さくて、小判焼きとも呼んだ。

一九七〇年（昭和四五）ごろまで三個で一〇円だったような気がする。

大判焼きより割安だった。

焼きたてを紙袋に入れてくれた。

冬は手がぬくまり、紙袋をてのひらに包むようにして歩きながら食べた。

## ■コロツケ・串カツ

母が店を切りまわして一日じゅう働いていたため、夕食に手の込んだ料理が出てくることは、まずなかった。

食卓には近くの商店から買ってくる惣菜がよく並んだ。

コロツケは、その既製品メニューのなかの主要な一品だった。

朝はパンで、トーストに挟んでよく食べた。

給食にもしきりに出た。

おやつにも食べた。

八幡通りに住んでいた小学生のころ、隣りに揚げたてのコロツケを売る店ができた。

買ったその場で熱々を立ち食いした。

残念ながらこの店はすぐに潰れてしまった。

一中・宮高の近くの肉屋でもコロツケと串カツの揚げたてを売っていた。

学校帰りに買い食い・立ち食いをした。

熱々に醤油をババッとかけて食った。

ソース派と醤油派がいる。

熱々のコロツケ・串カツには断然醤油が合うと思った。

串カツは、これが食べはじめだった。

大きな玉ねぎのライスと小さくて脂身の多い肉片が、ギトギ

トの油で揚げられていた。

いま考えれば少々油っこすぎた。

食べ終わった竹串を天井に投げて刺す客がいた。

油ジミだらけの天井には何本もの串が刺さっていた。

あの天井は、いったいどんな材質できていたのだろう。

肉屋の名前は、たしか畠山精肉店といった。

串カツはともかく、むかしはほんとうにコロツケをよく食べた。

（今日もコロツケ、明日もコロツケ、これじゃ年がら年じゅうコロツケ〜）

という古い歌を、よく口ずさんだ。

「コロツケの唄」といって、益田太郎冠者という人の作詞・作曲。

エノケンこと榎本健一が歌っていたような気がする。

ぼくの子ども時代にもそんな感じがあった。

それでも、好物だからボヤキなど出るはずもなかった。

いまでもときどき冷凍コロツケを自分で揚げて食べている。

うまく揚げるのはむずかしい。

## ■宮小

宮小——宮古小学校は、時の流れのなかで大きく変わった。

それでも逆ピラミッド校舎とプールが、かろうじて残っている。木造の校舎にはコンクリートのテラスがついていた。

というか、コンクリートの高い土台の上に校舎が載っていた。

もとは田んぼだったのだろう、水はけが悪くて雨が降ると校庭は水浸しになった。

テラスは〈だるまさんが転んだ〉をする格好の場所だった。

テラスの下には手入れの行き届いた花壇があった。

たしか五年から六年にかけて合唱団に入れられた。

音楽室からは中庭が見えた。

池があり、大きな鯉がいて、給食のパンをちぎってやった。

ぼくの年代は木造旧校舎に入った最後の、逆ピラミッド新校舎に入った最初の学年だったと思う。

プールもそのころにできた。

工事は旧校舎をコロで移動することから始まった。

旧校舎が使えないあいだ体育館をベニヤ板で仕切って教室代わりに使っていた。

裏山を発破で崩し、飛んできた石で旧校舎の屋根に穴があいた。古い木造校舎の雑巾掛けはたいへんだった。



ささくれでつつかえつつかえしたあげく、そのささくれが手に刺さった。

校庭には垣根以外に囲いはなく、どこからでも自由に入れた。横切って近道するおとなも多かった。

ドッチボールがさかんだった。

昼の休み以外に放課後にもドッチボールをした。

三角乗りで自転車に乗る練習をしたのも校庭だった。

日曜も学校とその周辺が主な遊び場だった。

大雨が降って海になった校庭の泥土を掘っては溜まった水を流すという、いま考えれば不思議な遊びもした。

泥んこ遊びだ。

公孫樹の大木が何本も立ち並び、秋には夕陽に燃え立った。

日がとつぷり暮れかかるころ、帰りをうながすように蝙蝠がひらひらと舞い飛んだ。

白いハンカチに石を包んで投げ上げると蝙蝠がつかれて落ちてきた。

#### \*後記

1. 逆ピラミッド校舎とそのまえにあったプールは、二〇一〇年（平成二二）の秋に解体されたらしい。

2. 校庭の南側にあった大木の並木は、公孫樹ではなく、ポプラだったという。

宮古市立第一中学校――

しかし、第一中学校などとは呼ばない。

一中もしくは宮古一中と呼ぶ。

二中もある。

河南・愛中（愛宕中学校）などとはクラブ活動などで交流があったが、愛中は廃校になってしまった。

一中は文武両道、勉強とスポーツの両立を目標に掲げていた。

一年と三年のときは、八幡さまの参道を通って正門から入った。参道沿いや敷地の東沿いの道には桜並木がつづいていた。

二年のときは東門から入った。

校庭の西側、八幡さまの麓も桜並木だった。

桜の木のそばに、逆さイチヨウがある。

校庭は開放されていて、入ろうと思えばいつでも、いろんなところから入れた。

二年のとき、十勝沖地震があった。

ガラスが割れるほどの強い揺れにクラスじゅうが総立ちになった。

悲鳴をあげる級友もいた。

八幡さまに全員が避難した。

二年生は逆さイチョウのところから八幡さまへ登る細い道を行った。

閉伊川の水が河口に引き、やがて逆流して押し寄せてくるのが山の上から見えた。

幸いに津波の被害はなかった。

そのときの担任は英語の佐藤先生。

一年のときは体育の伊香先生で、三年は二年から続いて佐藤先生だったと思う。

(後記―正しくは一年時が美術の坂本先生、三年時が伊香先生)

三年間テニス部に所属した。

軟式テニスで、硬式はなかった。

閉伊川の土手でランニング・柔軟体操・腹筋・腕立て伏せ・う

さぎ跳び・素振りをした。

八幡さまへ登る山道を何度も駆けあがり駆けおりました。

一〇〇段あまりの急な石段も駆けあがった。

五〇人以上も入った新人は、このハードトレーニングに恐れをなして一週間で半分が減り、夏休みまでにまた半分に減った。

練習のあとの水道の水はうまかった。

きつい練習はどうかこなしたがテニス自体はあまり上達しなかった。

部活に明け暮れて勉強もほとんどしなかったから、けつきよく文武不両立に終わった。

## ■宮高時代

宮小、一中と進んで宮高（岩手県立宮古高等学校）へ進学するというのは規定のコースのようなものだった。

水高——宮古水産高校にはなんとない憧れがあった。

ただ、体力もなく、まともに泳げもせず、水産業にかかわりのない家に育った自分には別の世界だと思っていた。

持ち上がりのような感じで入った宮高にはなじめなかった。

退学を考え、担任の先生に相談して説得され、思いとどまった。

英語の菅原先生だった。

転勤だったか辞めたのだったか、とにかくその年度で宮高からいなくなった。

飲んべえで、お別れにクラスでお酒を贈った。

二年になってクラスになじんだ。

隣り町の山田方面から通学してくる生徒も多かった。

男も女も和気あいあいとして、親しい友人もできた。

担任の教師の人柄もあったかもしれない。

三年になって一時、写真部に所属した。

併行して級友とボール同好会というのをでっちあげ、サッカー

やラグビーなどのボール遊びをやったが、これは自然消滅した。

卒業アルバム制作委員もやった。

制作請負は新町の城内写真館。

オリンピック（体育祭）のとき片目を眼底出血していて競技に参加せず、眼帯をした片目で写真を撮ってまわった。

その写真を卒業アルバムにいっぱい入れた。

卒業アルバム制作委員会の顧問？は英語の相山先生だった。

二年と三年の担任というのが、その相山先生だ。

やはり飲んべえで、授業に遅刻するは、宿酔で呂律がまわらずに授業を途中で切り上げて自習になるは、そんなことがしょっちゅうだった。

西町の借家に一人住まいで、なんどか遊びに行った。

教師らしいところのない、ありのままの男、ありのままの人間という感じがし、学校の勉強以外のなにかを自然に感じとらせてもらった気がする。

ある年の一月三日にドンという二、三年時の級友が結婚式を挙げた。

その席で久しぶりに相山先生に会った。

正月でもあり、めでたい式だから当然といえば当然だけれど、相変わらず酔っ払っていた。

## ■ ミントン・ハウス

ミントン・ハウスというジャズ喫茶があった。

築地一丁目一番地あたり、市役所の右斜向かいだった。

Kというマスターがやっていた。

愛称はチャーリー。

当時の宮古にジャズ喫茶は一軒しかなかった。

狭い店で、表で金魚屋を兼業していた。

一九七一年（昭和四六）ごろに開業した。

上京して数年たった夏に帰省したら、なくなっていた。

一九七八年（昭和五三）ごろだったと思う。

高校二年のとき級友のヤマに連れられて初めて行った。

もうひとりドンという級友といっしょのこともあった。

それまでとくにジャズが好きだったわけではなかったが、けっ

こう入りびたった。

「行って見ントン」

——だれかが駄洒落をとばした。

学校が終わると、末広町、中央通りを突っ切って、まっすぐミ

ントンに行く。

もちろん制服のままだ。

コーヒー代は弁当代を浮かしてつくった。

カウンターのいちばん奥に座り、一杯のコーヒーをすすりながらジャズの響きに身をまかせる。

いやなこと、悩みは、みんな忘れられた。

ジャズの知識はなかった。

レコード・ジャケットは見る。

ライナー・ノーツと言っていた解説文は読んでもウロ覚ええてい  
ど。

ミントン・ハウスという名前は、もともとニューヨークのハー  
レムにあったジャズ・バーの名前だというぐらいの知識は得た。

客はあまり入ってこなかった。

よく行っていたのは夕方前だ。

マスターは言った。

「夜に来んだあ」

客がいないのをいいことに、自分のレコードを持ち込んでかけ  
てもらった。

覚えているのは「浅川マキの世界」。

にが笑いしながらレコードに針を落とすと、マスターは小さな

ドアをくぐって金魚屋のほうへ姿を消した。

■不思議な地名

小学校の四年のころだった。

自転車で国道一〇六号線を西へ、盛岡方面へずっと漕いでいった。

ちよつとした冒険気分だった。

自転車は子ども用ではなく、母がうちの店で使っていた婦人用だった。

子ども用の自転車は買ってもらわなかった。

当時、自転車といえば、三角フレームで荷台の大きなタイプがまだ多かった。

酒屋さんや新聞配達屋さんが使うような、がっしりした黒い実用自転車だ。

それに対して、三角フレームでなく、多少華奢で軽い婦人用自転車が出まわりはじめていた。

当時は国道も、ところどころしか舗装されていなかった。

未舗装のほうが多かった。

一〇六号線は、館合〔たてあい〕の切り通しから西へ坂を下った県北バスの営業所のあたりが舗装工事の真っ最中で、ローラー車がさかんに動き回っていた。

その先は、ほとんど粗い土のデコボコ道だった。



近内口を過ぎ、千徳を越え、花輪橋を横目に見て、閉伊川沿いの道をずっと漕いでいった。

まわりは畑や田んぼばかりだった。

かなり遠くまで来たと思ったころ、ふと標識が目に入った。

花原市と書いてある。

——宮古の近くに、こんな市があるんだ<sup>13</sup>

まったく知らない地名に驚いた。

急に不安になり、あわてて埃っぽい道を引き返した。

花原市をハナハラシと読んだのだ。

ケバライチという地名は、耳から聞いて知っていた。

不思議な響きがした。

ただ、それを花原市と書き、どのへんにあるかということまでは、このときまだ知らなかった。

花原市は宮古市の大字「おおあぎ」で、国道一〇六号・JR山

田線沿いでは西の端に位置する。

そのさらに西は下閉伊郡新里村の墓目「ひきめ」だ。

これまた印象深い響きをもつ名だが、新里村と合併すると、一

〇六号・山田線沿いの宮古市の西端は新里の腹帯になる。

ハラオビではなくハラタイだ。

■市内転々

父は盛岡に生まれた人だった。

母は山田に生まれた。

戦後、ふたりは盛岡で出会って結婚し、兄が生まれた。

盛岡で修業して一人前の職人になった父は、山田に初めての店を持った。

一年後に宮古へ移り、黒田町に店を開いた。

その年、ぼくが生まれた。

四人家族で宮古に生まれたのは、ぼくひとりだ。

黒田町の家のことは、記憶の底に沈んでいる。

それでも、いくつか淡い記憶のかけらは浮いてくる。

店を兼ねた家は四辻の角地にあった。

向かい角の米屋、近くの煎餅屋は、いまもある。

中央通りに出る道筋に貸し本屋があった。

坂の上の横町「よこまち」に、母方の叔父夫婦が短いあいだ住んでいた。

御深山「おしんざん」の真下で、小さな庭のある日当たりのいい家だった。

海産物の商社員のような仕事をしていたと思う。

その仕事をやめて盛岡に引っ越し、小さな本屋を開業した。

ほかに宮古に親戚はいない。

うちは黒田町から新町〔あらまち〕に移った。

幼稚園に入るまえに、八幡通りに引越した。

このときまで家はみな借家。

八幡通りの家は長屋の一郭だった。

八幡通りは住居表示の変更で大通りになった。

店を大通りに開いたまま、千徳町に家を建てて引越した。

小学六年のときだ。

バス停のすぐそばだった。

小学校へは車やバスで通った。

中学時代は自転車通学。

高校ははじめ自転車だったが、たぶん一年の冬にバス通学にしたあたりから以後は、だいたいバスを使うようになった。

卒業して、ぼくは上京した。

その数年後、父と母は千徳町の奥に家を建てて引越した。

病がちの父を抱え、職人さんを使って店を切りまわしていた母も、歳と不況の波に堪えず店を閉じた。

父は千徳の家の近くにある病院に長いあいだ入り、屍となって、懸命に働いて建てた自分の家に帰った。

## ■新町

新町〔あらまち〕は、西に黒田町、東に本町〔もとまち〕、北に横町〔よこまち〕があり、横町に向かつてなだらかな上り坂になっっている。

中央通りを挟んだ南は、田町と呼んでいた。

いまの向町〔むかいまち〕だ。

黒田町から新町に移ったのは一九五六年（昭和三一）のことで、それから四年ぐらいいしかなかった。

店を兼ねた家は木造二階建ての民家だった。

外壁は板。

木の雨戸がついていて、それほど粗末な造りではなかった。

店を開くには、いい場所だったのだろう。

並びにクマヘイと呼んだ老舗の熊谷薬局があり、当時の蔵造りの建物はいまでも残っている。

中央通りと交わる角には箒やザルや塩などを売る店があった。

カドリンと呼ばれたらしい。

その向かい角が菓子屋のコーセイ堂で、漢字では光正堂とか光星堂と書いたような気がする。

店頭には不二家のペコちゃんの大きな人形が置かれていた。

コーセイ堂の並びに、ガラスをはめた蓋のついた木の箱に色と

りどりの生豆を入れて売っていた豆屋、坂下肉屋、岩手銀行、クマヘイの倉庫、山根煙草屋、東北銀行などがあつた。

第二幹線から北の横町寄りでは、角の沢田屋旅館と中澤書店ぐらいしか覚えていない。

中澤書店ではゴム動力の飛行機を買つた。

竹ヒゴをニューム管でつないだフレームに紙を張つてつくる模型で、宮古小学校の校庭に行つて飛ばした。

プラモデルも売つていた。

第二幹線を東の本町へ行つた北の角にも模型屋があり、たしか幾久屋といつた。

町内に友達がひとりいた。

家は煙草屋さんで、おとうさんは学校の先生だつた。

隣の倉庫に入りこんで遊んだりした。

その子の家には裏に土蔵があつた。

黒い重々しい鉄扉がついていた。

悪いことをすると入れられるのだと思つた。

新町というと、その土蔵が印象的だつたこともあつて、白壁の蔵の多い町という印象が強い。

## ■啄木の宮古寄港

石川啄木が宮古を訪れたのは、一九〇八年（明治四一）四月六日のことだった。

洪民村を追われて北海道に新天地を求めた啄木は、函館をはじめ札幌・小樽・釧路などの新聞社を転々と渡り歩いた。

啄木の伝記を読むと、北海道放浪とか漂泊という言葉がしきりに使われている。

宮古出身の新聞人である小国露堂と知り合って思想的に影響を受けたというのもこの頃だ。

北海道放浪をきりあげて上京し、創作活動に専念することを期した啄木は、一九〇八年四月三日に釧路新聞社を辞め、釧路港から酒田川丸に乗船した。

宮古経由・函館行き、安田船舶の蒸気船で、三四九トン。

二等船客の船賃三円七五銭。

石炭の積み込みが遅れ、酒田川丸が出港したのは五日午前七時三〇分だった。

翌六日の午後二時過ぎに宮古へ入港した。

宮古停泊は約六時間。

その間に啄木は、鍬ヶ崎の医師の道又金吾を訪ねている。

旧知の間柄というわけではなく、初対面だった。

菊池武治という盛岡出身の新聞記者仲間が書いてくれた紹介状を先に届け、そのあと訪ねていった。

ご馳走になったり、盛岡中学の恩師だった富田小一郎の近況を聞いたりして夕方に道又家を辞し、近所のうどん屋に入った。

この日の啄木日記が残っている。

全文が〈啄木寄港の地〉という石碑に刻まれ、宮古港を見下ろす光岸地の鏡岩、宮古漁業協同組合ビルのまえに建てられたのは一九七九年（昭和五四）四月六日。

啄木が宮古を訪れてから七一年後のことだ。

二八年の生涯で啄木が宮古の地を踏んだのは、あとにもさきにもこの一度きりだったらしい。

そして、生きてふたたび岩手の大地を踏みしめることはなかった。

啄木にとって宮古は、岩手最後の地となった。

■啄木の日記から

光岸地の鏡岩、宮古漁業協同組合ビルのまえにある（啄木寄港の地）という石碑には、啄木の日記が刻印されている。

「明治四十一年日誌」四月六日の記事で、この日、啄木は鋏ヶ崎へ上陸した。

短いけれど、当時の鋏ヶ崎の一面がかいまみられる貴重な文章だ。

全文を、新仮名遣いなどに表記を変えて引用したい。

——起きて見れば、雨が波のしぶきとともに甲板を洗っている。灰色の濃霧が視界を閉ざして、海は灰色の波をあげている。

船は灰色の波にもまれて、木の葉のごとく太平洋のなかに漂っている。

一〇時ごろ、ガスが晴れた。

午後二時一〇分、宮古港に入る。

すぐ上陸して入浴。

梅のつぼみを見て驚く。

梅ばかりではない、四方の山に松や杉、これは北海道で見られる景色だ。

菊池武治君の手紙をさきに届けておいて、道又金吾氏（医師）を訪ねる。



ご馳走になったり、富田小一郎先生の消息を聞いたりして夕刻に辞す。

街は古風な、沈んだ、かびの生えたような空気に満ちて、料理屋と遊女屋が軒を並べている。

街上を行くものは、たいていおしろいを厚く塗った抜き衣紋の女である。

鎮痛膏をこめかみに貼った女の家でウドンを食う。

ただ二間だけの隣りの一間では、一一歳ばかりの女の子が三味線を習っていた。

「芸者にするか」

と問えば、

「何になりやんすだかす」

夜九時抜錨。

同室の鰯取りの親方の気焔を聞く。

## ■むかしの鍬ヶ崎

宮古出身の盛合聰さんが書いた「啄木と小国露堂」という本がある。

一九九〇年（平成二）に熊谷印刷出版部から刊行された。

小国露堂というのは宮古出身の新聞人だ。

北海道に渡り、同じく北海道で新聞社を転々としていた啄木と交遊して思想的な影響を与えたといわれる。

この本には、啄木の鍬ヶ崎来港にまつわって、おおむねこんな記述がある。

——鍬ヶ崎の海岸通りの石積み岸壁から沖に向かって、木杭に橋桁、それに橋板が敷かれた木製の栈橋がつきでていた。

その栈橋には舳〔はしけ〕が着き、沖に停まっている船との連絡にあたった。

夏には背中を焼いた少年がその栈橋から海に飛び込んで泳ぎ、泳ぎ疲れては栈橋に寝そべって甲羅を焼いていた。

浜通りには飲食店・小料理屋・船具屋・旅館・油屋などが軒を並べていた。

もう一本の本通りには遊女屋が、呉服屋・薬屋・飴屋などの堅い商売の店にまじっていた。

その浜通りと本通りをつなぐ数本の横丁に小さな飲み屋があ

り、横丁をつきぬけて山の手に登ってゆくと、やや高級な料亭や  
医院・寺・神社などが急な石段の上にあった。

道又医院は浜通りからつきぬけて山の手に登る道又沢にある。

現在は改築して近代建築になったけれども、つい先年まで、む  
かしながらの木造の町医者邸だった。

遊女屋は姿を消し、いろいろな看板が変わったが、むかしなが  
らの家並みは変わらない。

啄木が立ち寄ったうどん屋は、道又医院から出て岸壁にいたる  
あいだのこと。

現在の宮古信用金庫鎌ヶ崎支店の前あたりに、賛成屋・たまや  
という二軒の蕎麦屋が三〇メートルほど離れて当時も営業して  
いたそうだから、そのいずれかだろう。

## ■消えた砂浜

閉伊川の河口右岸の藤原から南の、宮古湾に面した海岸線——そこにはかつて延々とつづく砂浜があり、松原があり、かつこの海水浴場になっていた。

砂浜は須賀と呼ばれた。

藤原須賀、つづいて磯鶏〔そけい〕の須賀……

小学生のころ、夏休みに入るや真っ先に駆けつけた。

宮古橋を渡り、浜街道（国道四五号）が南に大きくカーブしてゆくあたりで藤原保育所脇の小道に入り、砂浜へ抜けられた。

閉伊川の右岸沿いを河口の端、藤原須賀の北の端まで行くこともあった。

湾に向かって短い突堤がのびていた。

いまはバラ線でさえぎられて行けないが、どうにか形だけとはどめている。

保育所近くの須加に設けられた監視塔には、泳げる日は白旗が、天候不順で海が荒れて泳げないときは赤旗が掲げられた。

この旗は町なかの栄町にあった保健所のポールにも掲げられた。

海にはダボが浮かんでいた。

粗い網に包まれたガラスの浮き玉で、ロープで繋いであった。

そのダボをめざして泳いだ。

少しは泳げた。

運動神経がよくないせいか、ほとんど上達しなかった。

寒くて唇がブンドウ色になることもあった。

ブンドウ色は葡萄酒のことだ。

泳ぐ場所、甲羅干しする場所を、藤原の河口寄りから、しだいに磯鶏の岩場のほうへ移していった。

岩場には一番岩という名前がついていた。

その一番岩を越えると小さな浜がいくつかあった。

黄金浜やトド浜という名前だった。

一九八七年（昭和六二）発行の宮古市の地図をみた。

閉伊川河口から神林にかけての海岸には埠頭や木材港、なにに使われているのかわからない広大な空白地がある。

南北にのびていた砂浜や一番岩、黄金浜、トド浜などの、面影はもちろん、その名のなごりもとどめてはいない。

せめて名前ぐらい、なんらかのかたちで残せなかったものだろうかと思う。

## ■磯鶏村小学校

啄木の盛岡中学時代の同級生に、伊東圭一郎という人物がいた。一九〇三年（明治三六）三月に盛岡中学を卒業した伊東は、九月になって磯鶏村小学校に代用教員として赴任している。

磯鶏小学校は一八七六年（明治九）一二月に創立された古い学校だ。

かつては海に近い、いまの宮古市民文化会館のところにあった。いまは宮古市内に入っている磯鶏も、当時は下閉伊郡下の一漁村だった。

財政は苦しかったらしい。

伊東圭一郎は一三円の月給を一度には貰えず、五円、三円と分割して支給されたという。

残る五円はどうしたかというところ、〈素封家の岩船栄次郎さん方に下宿していたので、その下宿料だった〉が、〈役場ではそれを、岩船家の税金と相殺するという有様だった〉。

これは伊東の著書「人間啄木」に書いてある。

初版が一九五九年（昭和三四）五月、復刻版が一九九六年（平成八）七月に、岩手日報社から出ている。

引用をつけよう。

〈校長は晴山芳太郎先生（宮古市教育長晴山機智雄さんの厳父）

で、教員はたった四人だった。

私の半カ年の磯鶏生活での思い出は、あの美しい浜辺を散歩したことと、啄木から長い手紙を貰ったことである。

啄木は私の貧乏と病弱なのに同情して、月に二、三回長い長い手紙を呉れた。

或る晩、啄木の手紙を広げているところへ岩船夫人が入ってきたので、手伝ってもらって計ってみたら五間半あった。〜

伊東は磯鶏村小学校に半年ほどしかいなかった。

離任した理由は書かれていないが、さしずめ給料の遅配に嫌気がさしたのかもしれない。

盛岡へ戻り、その後、東京朝日新聞社などを経て岩手日報社の常勤顧問になっている。

伊東の在任した磯鶏村小学校へは、のちに一人の若い女性教師が赴任してくる。

本名を大村コウといった。

西塔幸子「さいとうこうこ」の名で歌を詠み、〈女啄木〉とも

〈山峡「やまかい」の歌人〉とも呼ばれた。

■女啄木―西塔幸子

下閉伊郡川井村に西塔幸子「さいとうこうこ」記念館がある。

一九九一年（平成三）に開館した。

かたわらに歌碑が建っている。

灯を消せば山の匂のしるくして

はろけくも吾は来つるものかな

西塔幸子は〈女啄木〉とも呼ばれた歌人で教師だった。

宮古とも縁があり、一九二一年（大正一〇）に磯鶏、当時の下閉伊郡磯鶏村の尋常高等小学校へ赴任している。

夫もまた下閉伊郡鍛ヶ崎町の尋常高等小学校へ赴任し、翌一九二二年には藤原にあつた住まいが類焼の難にあっている。

この火事の記事がないかと宮古市史年表を見たが出ていない。かわりに磯鶏に関するものでは一月二二日のところに磯鶏に電灯が点灯したという記事がある。

ランプから電灯へ切り替わる、まだそういう時代だった。

西塔幸子は一九〇〇年（明治三三）十一月一七日に紫波郡の不動村、いまの矢巾町に生まれた。

岩手師範学校女子部を卒業後、六人の子どもを生み育てながら県内各地、とくに山間地の小学校を転々とした。

〈はろけくも吾は来つるものかな〉という感慨は深かっただろう。



川井の江繫「えつなぎ」小学校に在任中に病を得て、一九三六年（昭和一一）六月二日に死んだ。

享年は数えで三七、満で三五歳だった。

翌年、残された一〇〇〇首ほどのなかから歌集「山峡〔やまかい〕」が遺族の手で編まれた。

二首だけ紹介しよう。

九十九「つくも」折る山路を越えて乗る馬の

ゆきなづみつつ日は暮れにけり

憂きことも束の間忘れすなほなる

心になりて山にもいふ

宮古の愛宕にお住まいで元教員の佐々木京子さんという方が、「歌集『山峡』の道を辿りて」を一九八八年（昭和六三）に、「山峡のみち」を二〇〇四年（平成一六）に自費出版しているという。ぜひ読んでみたいと思っっているけれど、ツテでもなければ自費出版というのはなかなか手に入らない。

#### \*後記

下閉伊郡川井村は、二〇一〇年（平成二二）一月一日に宮古市と合併した。

シジミとつくので貝の名前と間違えてしまいそうですが、宮古に育った人なら誰でも子供の頃、閉伊川の川縁や野原で何度も出会ったことのある赤茶の縞々の蝶の名前です。

この懐かしい蝶が、国内では初めて昭和二八年（一九五三年）に三陸沿岸地域で発見されたこと、現在日本版レッドデータブックに希少種として記載されていて絶滅の危機にあること、そして宮古で昭和六一年（一九八六年）に〈チョウセンアカシジミの会〉を発足させ保護活動を実践しているのが、宮高の同級生のOYさんだということを最近になって知りました。

OYさんのことは「IPANGU」という小冊子に紹介されていたのですが、聞いたことある名前だな？と気になっていて、あとで宮高の卒業アルバムをめくってみると、彼はアルバムの中にいました。

たぶん宮小、一中、宮高と一緒にいたように思います。

プロフィールを読んで知ったのですが、宮高時代にチョウセンアカシジミの研究で日本学生科学賞を受賞しています。

生物部の写真にも写っていました。

そして「宮古なんだからかなり」に出ていた亀岳中学校のホームページの「田代紹介」のところに、生徒といっしょに保護活動

を行なっている姿がありました。

チョウセンアカシジミの食樹であるトネリコが河川改修や伐採で激減したことが、この蝶が消えつつあることの原因だそうです。

OYさんは川岸や民家のまわりに一本一本トネリコを植えて、すみかを甦らせる運動を広げています。

「生息地を秘密にせず、みんなに知らせて守っていくことが今後の保護のポイント。

昔からあったものがなくなるとはどういうことか考えてもらいたい」

というのがOYさんからのメッセージです。

\*付記(じん)

「IPANGU」は岩手県広報課が県外に岩手の情報を発信している季刊広報誌。

<http://www.pref.iwate.jp/ipangu/> を参照。

チョウセンアカシジミの会の記事は同誌第二七号に掲載されている。

## ■日出島

浄土ヶ浜や蛸の浜から見ると左手、北方の洋上に、日出島が浮かんでいる。

手前にある岩礁は砂島〔さごじま〕という。

日出島は宮古でいちばん大きな島だ。

ある資料によると、周囲一八〇〇メートル・標高五〇メートル・面積一万二三九六平方メートル。

対岸の崎嶇ヶ崎の日出島海岸からは六〇〇メートルほど沖に位置する。

名前は、日の出る方向にある島という意味でつけられたらしい。古文書には秀島と書かれている例もあるという。

軍艦島という異名も持っている。

一八六九年（明治二）に官軍と幕府軍が戦った宮古港海戦のさには敵艦と見誤って発砲する軍艦があったといわれる。

宮古観光協会が選定した新宮古八景のひとつにも選ばれている。

太平洋の荒海、ごつごつした岩肌の無人島、赤松の多い緑におわれ、海鳥が舞う景色は、一幅の絵になっている。

この日出島を間近にのぞむ日出島海岸だったか、手前のローソク岩のあたりだったか、小学校のとき遠足に出かけた。

常安寺の坂をのぼって佐原「さばら」に抜け、そのあとがずいぶん長かった。

繁った緑のなかの小道を通って海岸に出た。

ぽっかり浮かんだ日出島は、波打ち際が急峻な崖になっていて、とても上陸できそうには見えない。

それでも、いつか行ってみたいと思った。

上陸は禁止されていることを、あとになって知った。

一九三五年（昭和一〇）一二月二四日にクロコシジロウミツバメという海鳥の繁殖地として国の天然記念物に指定されているからだ。

その後は浄土ヶ浜から出ている遊覧船に乗って見る機会が多い。

最近、人の住まない島にも住居表示があることを知った。

日出島は、宮古市大字崎楸ヶ崎第一八地割字大崎山五六番地一〇三だそうだ。

ついでに書いておくと、島は対岸の日出島集落の共同所有で、管理者は宮古市になっている。

## ■クロコシジロウミツバメ

動植物の和名を片仮名で書かれると、もとの意味がわからなくて困ることがある。

日出島に棲む国の天然記念物、クロコシジロウミツバメの場合もそうだ。

ついクロコ・シジロ・ウミツバメなどと区切って読んでしまい、「クロコとかシジロとかいうのはなんだろう?」

と首をかき上げてしまう。

調べてみると、黒腰白海燕と書くらしい。

これも黒腰・白海燕と区切ってはいけない。

意味が、まったく逆になってしまう。

黒・腰白・海燕――

つまり、「全体は黒く、腰の部分が白い、海燕」という意味で、

腰の白いのが特徴になっている。

実物を見た記憶はない。

というより、これがクロコシジロウミツバメだと意識して見た覚えはない。

浄土ヶ浜や蛸の浜などで無意識のうちに目に行っていることはあるのかもしれない。

なにも知らない幻の鳥なので、調べたことを書きとめておく。

鳴き声がグジグジとかグズグズと聞こえるらしく、俗称グズリ。全長一九センチほど。

魚や甲殻類が好き。

歩くのは苦手。

大洋に面した島に集団で棲息する。

土に三〇センチから一メートルの穴を掘って巣をつくる。

奥に枯れ葉を敷き、七月から八月に一個の卵を産む。

オス・メス交代で卵を抱き、三〇日ほどで孵化する。

親鳥は昼は洋上を飛びまわり、餌をとる。

海面近くを真つすぐ飛んでは横に崩れるような、不安定な飛び方をする。

陸地から数百キロ離れた外洋を飛翔したり、船のあとを追ったりもする。

日が沈んでから巣に帰り、翌朝の二時や三時には再び外洋へ出てゆく。

環境省の日本版レッド・リストに絶滅危惧種として登録されている。

三陸は東半球唯一の繁殖地で、日出島のほかに釜石の三貫島が知られる。

日出島では、一九八〇年代の後半から、やはり天然記念物のオミズナギドリが増え、ウミツバメの巣を襲って減少させているという。

■山田煎餅

ぴっちりと密閉したビニール袋に入っている。  
袋から出す。

中身はまるく、直径一五センチほど。

嵩はないのにズシリと重い。

黒くて薄い物体が重なっている。

表面はすべすべしたような、ざらついたような妙な感触。

くつついているのを一枚ひっぺがす。

ひらひら平べったい。

光にかざすと黒い点々が無数に見える。

胡麻の香りがただよう。

唾液が湧いてくる。

噛む。

弾力があって、くちやくちや音がするようだ。

舌にほのかな甘さが広がる。

噛めば噛むほど味が出てくる――

この不思議な食べ物が山田煎餅だ。

大好物である。

三陸名産。

宮古の南となり、下閉伊郡山田町の伝統ある生菓子だ。



もちろん宮古でも昔から売っている。

一袋一〇枚入りが五〇〇円ぐらい。

硬くなったら焼いて食べる。

最初から焼いたものを土産物屋で売っているが、嵩ばって枚数が少ない。

焼くのは自分で焼けるから必ず生を買う。

平たくのばすまえの煎餅餅「せんべいもち」というものもある。

黄な粉がまぶしてあって生煎餅ほど日持ちしない。

山田煎餅は維新後につくられはじめたという。

ある言い伝えによると、幕末のことだともいう。

——山田の関口に住む老婆の枕もとに、ある夜、お不動さまが立った。

お不動さまは、こう告げた。

「米の粉、胡麻で餅をつくって、ケガヅに備えろ」

ケガヅは飢渴で、飢饉のことだ。

老婆はお告げに従って餅をつくり、のばして天日に干し、保存食にした。

日持ちがして腹持ちもいい。

そのうえ、胡麻を使った黒い色はお不動さまそっくりだというので評判になり、以来、山田の名物になった。

## ■いか煎餅

宮古からのお土産に迷ったことはない。

いか煎餅――

これに決まっている。

岩手に範圍を広げると、江刺の岩谷堂羊羹と盛岡の南部煎餅。

どれも受けとる人が喜んでくれる。

お土産にするばかりではない。

もちろん自分用にも買う。

いか煎餅は、菅田という一軒の煎餅屋がつくっている。

繁華街の末広通りの北に並行した、第二幹線という通りにあり、買うときはいつも菅田の店まで行く。

看板には元祖とうたってある。

商標登録をしなかったというから、いか煎餅は全国いろいろなところでつくっている。

けれど、元祖などとうたわなくても、いか煎餅は宮古の菅田に決まっている。

それほど定番なのだ。

煎餅は烏賊の形をしている。

色は新鮮な烏賊の色だ。

するめ烏賊の出汁と粉末が練り込んであり、ほんのり適度に烏

賊の風味がただよう。

噛むと、けっこう硬い。

この硬さがいい。

袋から出しっぱなしにしていると湿つける。

湿つけてやわらかくなりたいか煎餅も独特の食感と味わいが

あって好きだ。

菅田は一九一二年（明治四五）から一〇〇年近くにわたって、

いか煎餅ひとすじにつくりつづけてきたという。

ほかの製品はつくっていない。

菅田に買いに行くとき、いつも何枚か白い紙袋に入れてサービスしてくれる。

これを歩きながら食べる。

二、三枚胃に納めると腹持ちがする。

煎餅というのは、菓子であるとともに保存食で携帯食だったなと納得する。

山田煎餅でも南部煎餅でもそうだ。

ぎゅっと実質がつまっている。

## ■ラサの煙突

自分が生まれる前から、ラサの煙突はずっと建っている。

宮古のランドマークだ。

盛岡方面から来る道みち、遠くからこの大煙突が見え始めると、  
「宮古に入ったな」

と感じる。

ラサ工業の、製錬所の煙突は、市街の南、小山田の標高九〇メートルほどの小高い山上にそびえている。

てっぺんの標高は二五〇メートル。

煙突そのものの高さは一六〇メートル。

先端に純金の避雷針がついているという噂がある。

実際の高さでいうと、日本一の大煙突は北海道の苫小牧にある  
王子製紙の煙突のようだ。

高さ二〇〇メートル。

ラサの煙突は第二位になるという。

炭坑節に、

（あんまり煙突が高いので、さぞやお月さん煙たかろ）

と歌われたのは、福岡県大牟田市旧三池炭鉱の煙突だった。

これは、わずか三メートルの高さしかないという。

それでも大切に保存され、国の有形文化財に指定されている。

ラサの煙突は、いつの日か、解体されてなくなるのだろうか。  
ラサの製錬所がなくなり、ハゲ山だった小山田の山並みは、いま  
ま緑に覆われている。

その緑を見てさえ妙な印象を受けるのだから、あの大煙突がなくな  
ったら、宮古の町は、なにか間の抜けた感じになるかもしれない。  
ない。

操業中は、町なかには硫黄臭い空気がただよっていた。

煙害・公害もあった。

サイレンが毎日、町に鳴りわたっていた。

サイレンは、〈ポー〉と呼ばれた。

たしか午前七時四五分・正午・午後四時の三回鳴った。

ポーが聞こえなくなり、煙りやにおいも消え、いつのまにかハ

ゲ山に緑が戻った。

宮古の町の移り変わりを見下ろしながら、いまもラサの煙突は  
静かにじっと建っている。

## ■ 鋏ヶ崎の〈遺跡〉消滅

光岸地（「こうがんじ」）の坂を鋏ヶ崎方向に下った右手に大きな建造物の〈遺跡〉がある。

あれはなんだったろうと思っていた。

すつぽり抜け落ちていた記憶が、ある新聞記事を見てよみがえった。

田老鉦山から運ばれてきた鉦石の貯蔵施設だった。

新聞記事というのは、二〇〇四年（平成一六）六月二九日付の毎日新聞に載った、「宮古の産業史伝える鉦石貯蔵施設、解体工事始まる」という鬼山親芳記者の記事。

ネット・サーフィンをしているとき偶然に見つけた。

この件についての情報をほかに知らないのです、心覚えのために要点を引用させていただきます。

——旧ラサ工業・田老鉦業所の宮古出張所で、戦前からあった鉦石貯蔵施設の解体工事が始まった。

宮古市臨港通の出崎埠頭に面した鉄筋コンクリート造り二棟で、五階・四階建てのビルに相当する。

一三・五キロ離れた田老鉦山から索道で運ばれた銅・鉛などを貯蔵し、三・五キロ西の製錬所に貨車やトラックで積み出していた。

一九三六年（昭和一一）に建造され、一九七一年（昭和四六）

田老鉦山が閉山すると閉鎖された。

老朽化したものの、頑強な建造物は、日本で二番めに高いといわれた製錬所の煙突とともに当時の活況を伝えている。

解体は九月末に終わり、廃材は六〇〇〇トンに及ぶ見込み。

以上が記事の概要。

ラサ工業本社は、〈廃虚のようだといわれていたので景観にも配慮〉して解体に踏み切ったという。

長いあいだ放置されていたが、宮古の産業史に残る数少ない遺跡だったあの重厚な構造物を、なにかに再利用できなかつたものだろうか。

鉦ヶ崎上町の山際にある遺跡は残っている。

田老鉦山から鉄索（索道）で運んできた鉦石を降ろす鉦山駅だ。

付近の人に聞いた話では、山が崩れる恐れがあるから、解体できないのだという。

## ■ 田老鉱山

田老（たろう）の西部、下閉伊郡の岩泉町に近い山間地では、江戸期から笹平や猪子（ししこ）で鉄鉱が採取されていたという。どうやら豊富な地下資源が眠っているらしい。

金鉱はないのだろうか。

安政年間というから一八五四年から一八六〇年ごろのこと、易断の高島嘉右衛門が田老村の資産家のもとに身を寄せていたときに付近の鉱石に目をつけ、十数年にわたって鉄鉱石を採取したという話もある。

近代に入って、ラサ島燐鉱株式会社、のちのラサ工業が田老の鉱石を買収し、操業を始めた。

一九一九年（大正八）のことだ。

一九三五年（昭和一〇）に大鉱床が発見され、翌年ラサ工業・田老鉱業所の本格操業が始まる。

田老と宮古鋳ヶ崎を結ぶロープウェイの鉄索（索道）や鉱山駅、鉱石貯蔵施設が建造されたのは、このときだ。

一九三九年（昭和一四）には小山田に製錬所が完成する。

大煙突もでき、銅鉱の製錬、硫酸の製造を始めた。

一九四五年（昭和二〇）の敗戦や、一九六一年（昭和三六）五月の三陸フェーン大火による被災で休山するなど、休山と再開を



何度か繰り返した。

そして銅市況の悪化には勝てず、一九七一年（昭和四六）ついに閉山。

従業員は全員が解雇された。

これが急いで調べた田老鉱山のおおまかな歴史だ。

鉱山跡地にはその後、明星大学が一九七九年（昭和五四）に田老キャンパスを、一九八四年（昭和五九）には宇宙線観測所を開設したという。

鉱山跡地に大学キャンパスというのも、なにか気になる話だ。

ちよつと調べたかぎりでは、学生であふれているわけでも、いつも授業が行なわれているわけでもない。

キャンパスといっても、セミナーハウスがあるくらいで、長期休暇中の合宿などに使われているようだ。

余談だが、廃墟マニアという人たちがいる。

田老鉱山の廃墟は、その人たちのあいだで、日本屈指のものとされているらしい。

■ うみねこパン

浄土ヶ浜ターミナルビルの下の小石浜（黒石浜）に、県北バスの観光船発着所がある。

そこから島めぐり遊覧船の陸中丸に乗る。

すると、出航するときから栈橋に戻ってくるまで、ウミネコが群らがってついてくる。

乗ったことはないけれど、田老行きのウミネコ航路でも同じだという。

船内ではへうみねこパンなるものを売っている。

直截なネーミングには脱帽するしかない。

まさに名称そのもののパンで、ウミネコの餌付け用だ。

一袋一〇〇円。

製造元は市内保久田の丸長製パン。

宮古人なら誰でも知っている？あのイボイボパンをつくっているパン屋さんだ。

イボイボパンのほんとうの名前は（ヘクッキーパン）。

（へうみねこパン）は、挽いた若布や昆布などの海藻が生地に練り込んである。

人間が食べて食べられないことはない。

試しに食べてみた。

ぼそぼそして、ちよつと抵抗はある。

遊覧船の船尾に行つて、へうみねこパンを千切つて宙に放る。  
ウミネコがくちばしでじょうずにキャッチする。

デッキから身を乗り出すようにしてへうみねこパンを持った  
手を伸ばしても手からとつてゆく。

なかなかよそではできない体験だ。

だから、はじめは一個しか買わなかつたへうみねこパンを、  
何個も買つてはウミネコに与えることになる。

ガイド嬢の観光案内もうわのそらで耳に入らない。

肝心の景色を見るのさえ、つい忘れてしまう……

ウミネコの餌付け用パンを開発したのは宮古が日本で最初。

餌付けに成功したのも浄土ヶ浜が日本で最初だという。

日本ばかりでなく、ひよつとしたら世界でも最初なのではない  
だろうか。

## ■日立浜の青年漁師

「平運丸 青年漁師の店」という宮古発のウェブ・サイトがある。

おもしろいので、よく見にゆく。

青年漁師は三〇歳前。

鍬ヶ崎の日立浜に住んでいる。

海が大荒れでなければ毎日、父親と二人で海に出て漁をする。

一年じゅう漁だけで生計を立てている、本物の漁師だ。

こういう若い漁師は、ほかにいないらしい。

平運丸は九・七トン。

たくさんの漁の道具を積んで二〇〇海里まで行けるような、ち

よつと大きな漁船だという。

それに、さつぱを持っている。

さつぱは磯漁で使う小さな舟だ。

「青年漁師の店」では、自分がとってきた魚介類や海藻の通信販

売をする。

ビデオを撮影して配信する。

ビートルズが好きで、ベースを弾き、バンドをやり、「Penny

Lane」という別のサイトも運営している。

「青年漁師の店」のなかにある「海日記」には漁師の生活が記録

されている。

漁船を操り、直射日光や風雨・雪のなか、時には大波にさらわれそうになりながら魚や蛸や毛蟹やウニなどをとる漁師の生活は、想像してみるしかなかった。

それが、「海日記」をはじめとしたサイトのコンテンツを見てみると手にとるようにわかる。

少なくともわかる気にさせてくれる。

宮古に住んでいたとき、海はたまに泳ぎや釣りや散歩、つまり遊びに行くところだった。

間近にありながら遠い存在、気になりながらよくわからない場所、それが海であり、港であり、漁師の生活だった。

いま海から遠い内陸で暮らしながら、日立浜の青年漁師のサイトに接して、宮古にいたころよりはるかに三陸の海を身近に感じることができると。

これもインターネットのおかげだ。

\*「平運丸 青年漁師の店」<http://www.heiun.com/index.html>

## ■漁師ことば

「平運丸 青年漁師の店」に載っている「海日記」を読んでいると、しばしば「えほ」と驚く単語に出くわす。

たとえば〈日本大陸〉。

はじめは異様に感じた表現も、日記を読み進んで海の日常に同化してくると、波に揺れる不安定な船から陸地を遠く望んだ感覚が、ことばの上で生きていると思えてくる。

〈きよみず〉なんていう見当のつかないことばもある。

青年漁師の説明によれば、これは流水の溶けた水が混ざった水塊だという。

塩分濃度が極端に低く、海がどす黒くなる。

北海道沖から南下し、年によって違うけれど、早ければ毛蟹の漁期の三月中旬に三陸沖にやってくる。

その影響で毛蟹は海底の砂に潜り、あまり獲れなくなる。

〈きよみず〉のピークの四月初旬から下旬には、まったく魚が獲れなくなることもある、という。

漢字ではどう書かわからない。

〈清水〉あるいは〈虚水〉だろうか。

日記のなかで説明してくれていれば助かるけれど、説明なしに、ポンと投げ出されているようなことばもある。

それはそれで、さまざまに想像してみる楽しみがある。

けつきよくわからなくて、降参するようにホームページの揭示板に書き込んで問い合わせる。

たとえば〈スミス〉には、こういう返事をもらった。

海老のような小さい虫で、肉を分解する。

陸で死骸にたくさんウジが湧くように、海ではスミスがたかる。

人間の遺体もいちころである……

使っている本人も、意味は通じるが何語かさえわからずに喋っていることばもあるようだ。

たとえば〈ライシン〉。

船上で物を固定するロープのことらしい。

年寄はライスン、レアスンと発音するという。

しろうとには語源の見当もつかない。

■ スンナ、モウガナ

漁師ことばを、もう少し続けたい。

陸に住む人間にとつては、ことばを通して違う世界をかいまみ  
る思いがする。

いま陸に住む人間と書いた。

この陸はリクともオカとも読める。

漁師は、陸地をさす以外に、陸地に近く、浅い海のことをオカ  
と呼ぶこともあるらしい。

日立浜の竜神崎からのびる防波堤に赤灯台がある。

港の出入口にあたり、ここまでが宮古港内。

その外が宮古湾内。

港内から湾内に出るといふ微妙な表現がある。

重茂〔おもえ〕半島北端の閉伊崎と崎山の姉ヶ崎を結んだ線ま  
でが湾内で、その東が外海。

この外海はソトウミともトガイとも言う。

トガイは実際に発音するとトゲエと訛る。

いい漁場らしい。

籠〔かご〕のなかに餌を仕掛けてロープでつなぎ、何個も海に  
沈めて魚や毛蟹・蛸などをとるのが籠漁。

海面にはボンデンが浮いている。



発泡スチロールの浮きに旗竿をつけたもので、籠の目印になる。漢字では梵天と書くらしい。

ロープをラインホーラーで巻き上げて海底から籠を上げ、獲物を出して船の生簀に入れる。

また籠に餌を入れて沈める。

めずらしい魚や売りものにはならないけれどおいしい獲物がかかるとスннаにする。

スннаとは、魚市場に水揚げせず、家に持ち帰って食べる自家消費用の魚の意味らしい。

モウガナと遭遇して一部をスннаにすることもある。

モウガナは鮫のことだという。

スннаもモウガナも初耳だった。

スннаは寸菜もしくは寸魚と書くのだろうか。

モウガナではなくモウカザメなら聞いた覚えがある。

真鱧鮫のことだ。

この伝でゆけばモウガナは真鱧魚だろう。

魚はナとも読む。

こういうことばを集めて単語集をつくったらおもしろい。

「みちのく宮古の漁師ことば集」だ。

## ■角力浜の謎

高校時代の夏に、自転車で浄土ヶ浜へよく行った。

光岸地〔こうがんじ〕の切り通しの坂はきつい。

築地から臨港通に入って鉞ヶ崎の浜通りを、港沿いにぐるっと時計回りに回ってゆく。

途中に日立浜がある。

強い陽射しを受けた海には、さつぱがたくさん浮かんでいた。

さつぱは磯漁に使う小舟で、須賀とよばれる浜にもさつぱが陸揚げされている。

そばには網をつくろい、道具こつつあぎ（漁の道具づくり）をしている漁師の姿があった。

隣りが角力浜〔すもうはま〕だ。

バス停があり、民宿や魚の加工場や小型船の造船所などが並んでいた。

日立浜・角力浜を過ぎ、左に急カーブして浄土ヶ浜のターミナルビルへ向かって登ってゆく。

この長い坂道を、自転車で登りきるのはたいへんだ。

車が来なければ坂道をクネクネ蛇行して登れるが、夏は車が多い。

大型バスも頻繁に通る。

登りきれずに最後は押して歩くこともあった。

頂上のターミナルビルあたりまでが日立浜町だ。

日立浜町という名は、二つ浜、浸る浜の転訛したものと「角川日本地名大辞典」の岩手県の巻に書いてある。

背後が山で、大雨が降ると雨水が急斜面を流れくだる。

浄土ヶ浜のターミナルビルに登ってゆく坂道からも、ほかの坂道からも、コンクリートの上を大量の雨水が下ってくる。

高波・津波に襲われる。

水に浸る浜という説はうなずける。

二つ浜という説も捨てがたい。

日立浜と角力浜がある。

ところが、地名辞典には角力浜ではなく篠浜と書いてある。

篠浜とは初耳だ。

バス停の名は角力浜で、角力浜を土地の人はスモバマと呼ぶ。

ひよつとして、スモバマはシノハマが訛ったものだろうか。

そして、あとから角力浜という漢字があてられたのだろうか――

――と首をひねっている。

角力浜には思い出があります。

角力浜は、実現されなかった〈父の夢の場所〉でした。

父は今から一五年ぐらい前に、所有していた角力浜で観光事業を行なおうとしていました。

宮古に観光で来た人たちに、海の近くで美味しいものを食べてもらいたい、というのが希望でした。

県南でほかの事業を立ち上げていた父にとって、離れた宮古で新しいことを始めるのは無理があったと思います。

角力浜に、事務所とモーターボートといけすを準備したところで、計画を中断してしまいました。

新しい事業を続けていくには、多くの資金と時間とスタッフが必要ですが、それが不足していたのだと思います。

上京して離れて暮らしていた私は、そのことを聞き、また父の新しいことやりたい病が始まったな、ぐらいにしか考えていませんでした。

それまで何度か計画に協力したことがあったのですが、今度はちよつと無理だなど思っていました。

いつ頃から構想を立てていたのかは知りませんでした。

中断したあとに聞いてみると、角力浜をフィッシャーマンズワ

ーフのようにしたかったとのことでした。

私はまたもやこころの中で、やっぱり無理じゃないかなと思いましたが。

いつも夢は誰よりも大きく、挫折してもめげない父でした。

そんな父が病に倒れました。

会社の負債の補填のために次つぎと家や土地を売却していったのですが、最後まで角力浜は手放しませんでした。

亡くなったあと、どうしても相続を放棄しなければいけない状況になり、〈父の夢の場所〉は国有地になりました。

## ■ 鋏ヶ崎

高校時代、鋏ヶ崎に同級生がふたりいた。

ひとりには飲み屋、ひとりには船具屋の息子だった。

飲み屋のほうに一度だけ遊びに行ったことがある。

鋏ヶ崎上町あたりだった。

友人数人が集まり、店の二階で酒を飲み、酔って泊まった。

朝になって歩いて帰る途中、あたりには醤油の強いカマリ（香り・匂い）がただよっていた。

近くに醸造所があった。

鋏ヶ崎が上・仲・下の三町に分かれていることも当時は知らなかった。

漁港のあたり一帯をひっくるめて鋏ヶ崎と呼んでいた。

港のある町が鋏ヶ崎だ。

港も、宮古港・宮古漁港などとは呼ばず、鋏ヶ崎、あるいは単に港と呼んでいた。

魚市場の一帯には古びた木造の建物が並び、構内は薄暗く、漁船団が入港すると一気に活気づく。

一万トン岸壁に大型船や自衛隊の艦艇が入港するより、それはずつと華やかだった。

秋刀魚の水揚げはすごかった。

毎年八月半ばに、本州ではいちばん初めに銚ヶ崎に秋刀魚が水揚げされる。

フライキをなびかせ勇んで入港する秋刀魚船を迎え、港は沸騰する。

フライキは大漁旗のことだが、英語なのか日本語なのかわからなかった。

魚市場にはゴムの黒い長靴ズボン、黒い手袋をしたおじさん・おばさんの作業員がたくさんいた。

ねじり鉢巻で、緑の紙を敷いた木製のトロ箱（魚箱）に秋刀魚を詰める。

高いところにある製氷所から砕かれた氷が太い管を伝って降りてくる。

それをザーツザーツと入れてゆく――

そういう光景に見入っていた小学生のころの記憶がよみがえってくる。

岸壁には秋刀魚が散らばっていた。

ウミネコやカモメ、カラスたちがさらってゆくまえに、それを拾って帰りたいと思ったものだった。

## ■干拓地没収事件

「角力浜の謎」で触れた日立浜町の篠浜が埋め立てられたのは、一九三九年（昭和一四）のことだと「角川日本地名大辞典」第3巻・岩手県編に出ている。

それよりずっと昔の江戸時代、鍬ヶ崎では干拓地没収事件というのが起きている。

手もとに「沢内風土記」という小冊子がある。

沢内というのは、県の南西部に位置する和賀郡の沢内村のこと。冊子は沢内村郷土史研究会が一九七六年（昭和五一年）に発行した。

著者は、宮古代官所の下役で漢学者の、高橋子績（しせき）だ。解説を泉川正という黒沢尻北高校の先生が書き、なかに干拓地没収事件のあらましが載っている。

高橋子績の父は名を治富（はるよし）といい、やはり宮古代官所の下役だった。

下役とは藩から派遣された役人ではなく、現地採用された役人のことで、土地の有力者・豪族のなかから任命されるらしい。

一七二八年（享保一三）に治富は、鍬ヶ崎の干潟五二石分を拝領し、宅地を造成することになった。

一家の資財を投げうって、営々一〇年の辛苦の末に、やっと工



事が完成した。

ところが、終わったと思つて肩の力を抜いた途端、干拓地は盛岡藩によつて没収されてしまう。

すでに完成していた民家二七軒はすべて壊され、干拓のため干潟に立てた乱杭も抜き去られる。

この処罰の理由は、埋め立てて田畑にするところを屋敷にし、海に乱杭を立てて石垣を張り出し船の出入りを妨げた、というものであった。

これはどうもおかしい。

高橋治富にねたみをもつ者が代官所において、落としいれようと虚偽の報告をした結果なのではないか――

そう解説には書かれている。

この干拓地とは鰍ヶ崎のどのあたりのことなのかはわからない。

事情もよく飲みこめない点があるけれど、解説にあるとおりだとしたら、ひどい話だ。

■ 「沢内風土記」の著者

江戸時代に鍬ヶ崎で起きた干拓地没収事件――

その渦に巻きこまれた高橋家の当主は治富〔はるよし〕といった。

その子が子績〔しせき〕で、干拓工事の実際の任にあたったのは子績だったらしい。

高橋子績は一七〇〇年（元禄一三）宮古に生まれた。

一七二七年（享保一二）船手役に任じられる。

船手役は盛岡藩の外港である宮古港に置かれた藩船の監督者のことだろう。

一七三七年（元文二）宮古代官所の下役に就任。

その間に干拓地没収事件が起きている。

一七五七年（宝暦七）父の治富が引退し、家督を継ぐ。

ときに五八歳。

干拓地没収事件を除けば、まづまづ順調な半生だったといってもいい。

ところが、六三歳になった一七六二年（宝暦一二）のこと、突然、盛岡藩から沢内代官所への出向命令が下される。

理由は示されなかった。

干拓事件があとを引いていたのだろうか、海に面した宮古・鍬

ヶ崎で船手役を務めた人間に、見も知らぬ内陸の遠い土地、半年は雪に埋もれる山奥の豪雪地へすぐに出向しろという。

これは、左遷というより流罪に等しいものだったと、「沢内風土記」の解説には書かれている。

「沢内風土記」は、その沢内村で過ごした八年のあいだに出会った自然や風物・習慣・人情などの観察をつづった随筆。

代官所の役人を務めるかたわら、漢学者だった高橋子績は、この「沢内風土記」をはじめ、「南部封域志」「宮古八景詩稿並小序」「横山八幡宮回縁記」「重修横山八幡宮記」「黒森山陵誌」などを漢文で著したという。

「宮古八景詩稿並小序」だけでも読んでみたいが手に入らない。一七七〇年（明和七）に高橋子績は許されて宮古へ戻る。

時に七一歳。

そして、一一年後の一七八一年（天明一）に八二歳で死去。

墓は沢田の常安寺にある。